西頻新

沖六年四月号

日蓮上人

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和六年三月三十一日印刷納本
昭和六年四月一日発行

大市は値下げと
別格式料理で

大喝采

登録出願中
モダーン
エロなべ付
長堀料理

別格式
五色田樂
筍御飯

大阪長堀橋
エロふぐ
肉と料理
乙女ダンス
有藝仲居
大市
電話船場
三二〇八〇
四二五八〇

御宴會は必ず
長堀の大市へ

風味必ず御氣に召す
天ぷら御料理
季節日本御料理

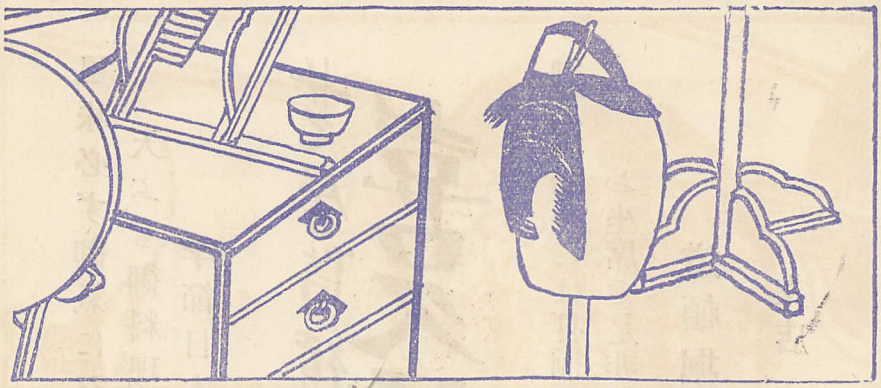
芝居情緒と食道楽

喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて
お坐席で是非御會食を！

道頓堀戎ばし北詰

支店
大阪支店　北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋



道頓堀

昭和六年四月號　第六年　第五十五輯

口繪

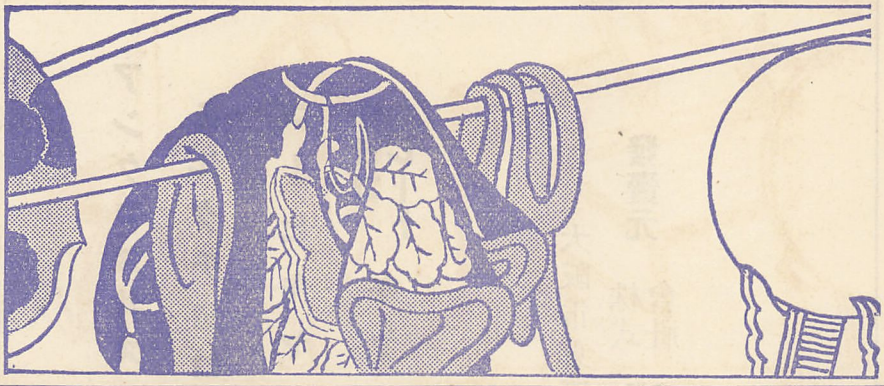
◆中座五郎劇◇「幸運の渦卷」五郎宿の主人惣右衞門・秀蝶娘お秋・蝶六白痴龜太郎・大磯妻お德・五樂金貸宗兵衞◇「根なし草」桃蝶女房お福・五郎左官辰三・蝶六父吉五郎・時雄山中久三郎・五樂鰌鍋屋・小次郎大工太吉◇「おちゝ」五郎坂口・大磯妻芳子・勢蝶牛乳配達◇「功名愚談」五郎進藤・宗蝶非人◆浪花座家庭劇◇「朝顔の種」十吾島田・小織谷本◇「浮浪者の娘」十吾母お初・天外息章太郎・十次郎父喜七郎◇「角笛」石井母お絹・文童惣太郎◇「父の場合」小織父善七・春日愛子・賀川水原◇「スポーツ狂時代」富士島高橋・三郎悴良一・三樂鳴尾・村田おせき・天照木村◆角座新國劇◇「白野辨十郎」島田白野・秋月來栖・二葉千種・久松千種◇「雪の渡り鳥」辰巳鯉名の銀平◆文樂座人形淨瑠璃◇「日蓮聖人御法海」法論石の段・榮三日蓮◇同土牢の段・扇太郎四條金吾・榮三日蓮・紋十郎日朗・玉德岩淵◇同塚原三味堂の段・榮三日蓮・紋十郎日朗◇同龍の口の段・玉幸判官・傳之助丹平・榮三日蓮◇同本門寺の段・紋十郎日朗・榮三日蓮◇「近頃河原の達引」堀川猿廻しの段・小兵吉與次郎母・扇太郎傳兵衞・文五郎おしゆん・榮三與次郎◇「鬼一法眼三略卷」五條橋の段・紋十郎牛若丸・政龜辨慶◆松竹座「春のおどり」グラフィック

◇表　紙……（日蓮聖人古版畫）……

◇三十年記念興行を終へて……曾我廼家五郎（二）

誌上漫談會　春と喜劇オン・パレード……（四）
曾我廼家十吾・曾我廼家蝶六・曾我廼家十次郎
曾我廼家大磯・曾我廼家林蝶・曾我廼家小次郎（順序不同）

◆新作塚原三味堂に就て……食滿南北（一一）
◆「日蓮聖人御法海」勘作住家に就て…豐竹古靱太夫（二一）
◆猿廻しは世話物の錚々たるもの……竹本土佐太夫（二七）
◇準備時代より躍進期へ……俵藤丈夫（一二）
◇『白野辨十郎』上演に際して……島田正吾（一四）



◇春のぞめきを他所に……辰己柳太郎（一五）
◇蘇生した辨十郎……額田六福（一六）

見たまゝ居

雪の渡り鳥（三幕六場）……角座・新國劇（一八）
白野辨十郎（五幕）……角座・新國劇（三八）

◇第一劇場は何をしたか……野淵昶（三〇）
◇第一劇場の『嘆きの天使』を見て……堀正旗（四三）
◇舞臺は廻りつゝある……森田信義（四六）

床本

『日蓮聖人御法海』佐渡ケ島塚原三昧堂の段……倉滿南北新作（二三）

◇春の踊について或る批評家に答へる……大森正男（三二）
◇春は陽氣の加減で……杵屋正一郎（三四）
◇ゆめ・ゆめ……香椎園子（三五）
◇『春のおどり』から……恩地かつ子（三六）

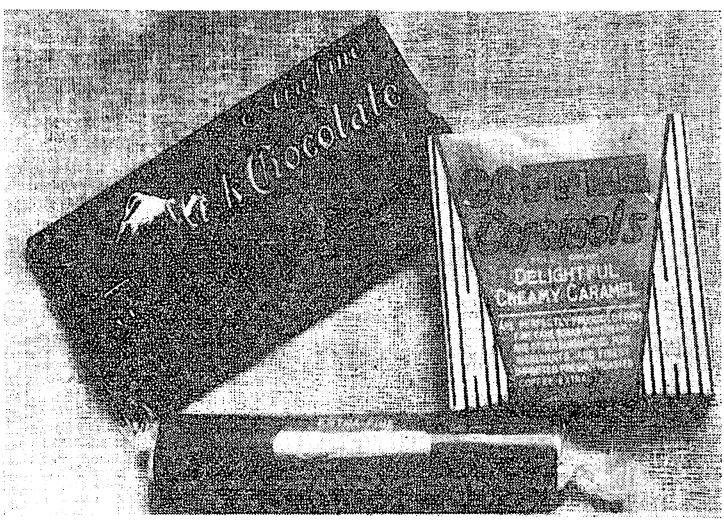
映畫欄

有憂華（誌上封切）……蒲田映畫……（五〇）
紋三郎の秀（誌上封切）……下加茂映畫……（五二）

◇ガクゲキ餘談……（三七）
◇喫煙室……（四八）
◇扉及び挿繪……田中滿彦
◇編輯後記……

アングロス井ス
ミルクチヨコレート
コーヒキャラメル
チヨコレート キャラメル

大阪市東區豐後町三番地
發賣元 株式會社 横山商店
電話東(94)二〇一六六一三番



大阪市東區京橋三丁目七十五番地

株式會社 大林組

電話東(94)自長八六〇番至長五四四〇九番 自長八六五番至長六六四七三番

東京支店　東京市麹町區丸ノ内一丁目二番地　電話丸ノ内(23)自長三四二一番至三四二七番

横濱支店　横濱市中區相生町三丁目五十三番地　電話長者町(3)自長三三三七番至三三三九番

名古屋支店　名古屋市中區新柳町六丁目三番地　電話本局(2)長一〇〇二五番八〇六八番

福岡支店　福岡市中島町五十九番地　電話福岡長一四一九番長四七六三番

京都營業所　京都市中京區堺町通御池下ル丸木材木町六百七十五番地　電話本局(2)三三六番三三七番

神戸營業所　神戸市海岸通十二番　電話三宮(3)八一一九番三一〇七番

金澤營業所　金澤市下堤町六十一番地　電話金澤二四七四番

工作所大阪工場　大阪市港區千島町六番地　電話櫻川(64)自長七六〇番至長七六二番二六九六七番

工作所東京工場　東京市深川區鹽崎町一號埋立地　話本所(73)長二二一五六番二二一六六八七番

眼鏡印
肝油
ボクラノ滋養
ボクラノ肝油……
ビタミンA及Dの含有量第一
全國著名藥店にあり
大阪・道修町
伊藤千太郎商會

憧れに春

アベノ橋より直通
花の吉野
大割引往復
一圓半
（四月中 正午から）

櫻の新名所
四月上旬見頃
御所堤の夜櫻
割引往復 一圓
（四月十五日マデ）

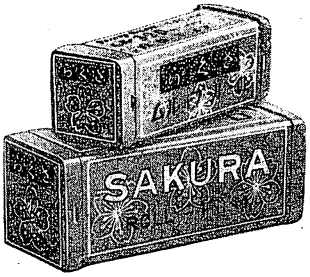
観心寺
天野山
長野遊園
玉手遊園

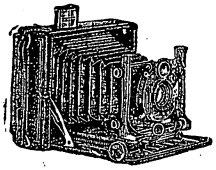
ぼたん
（四月下旬より）
當麻寺
石光寺

アベノ橋 **大鐵電車**

輸入品に比し優るとも
毫も劣らぬ國産品

リリーカメラ
パールカメラ
アイデアカメラ
パーレットカメラ
さくら
ロールフヰルム
各判完成
（カタログ進呈）



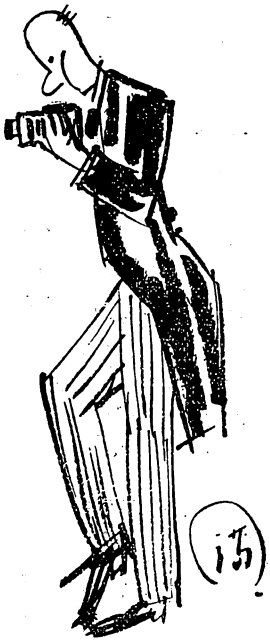


カメラは優良國産品を！

寫眞機及小型活動寫眞機

小西六大阪支店

大阪市長堀橋筋壹丁目



四月の ═══ "幸運の渦巻" ═══ 中座

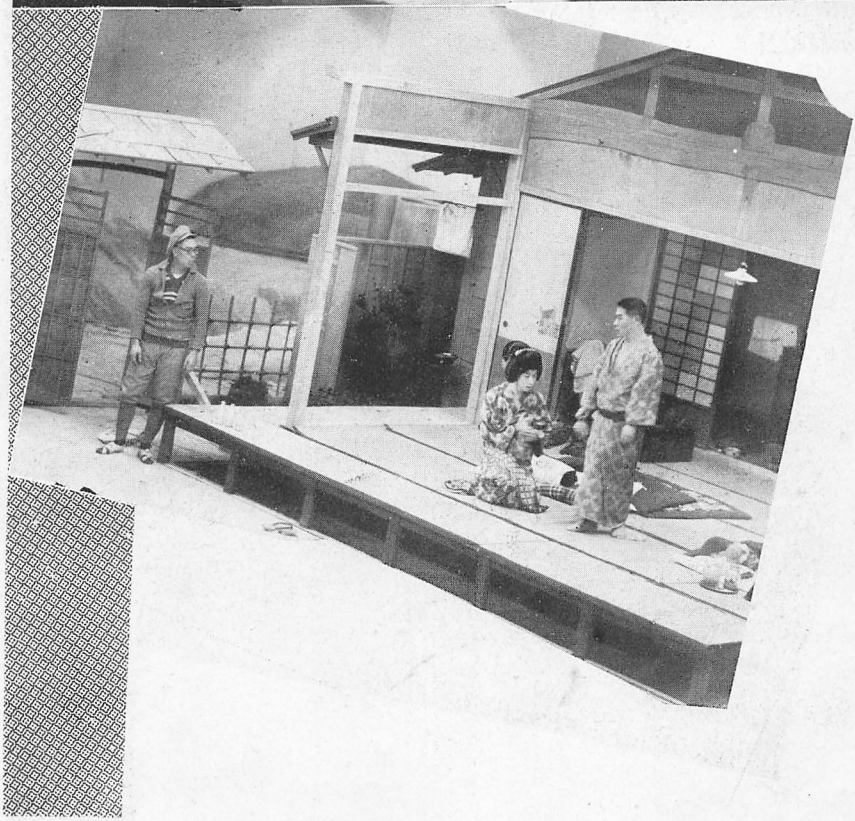
温泉宿萬屋主人物右衛門 • 實我硒家五郎

四月の中座五郎劇二の替り

（上）〃根なし草〃

（下）〃幸運の渦巻〃

桃蝶の女房お福
五郎の左官辰三
蝶六のお福の父吉五郎
時雄の山中久三郎
五郎の萬屋惣右衛門
秀蝶の娘お秋
蝶六の白痴の亀太郎



（上）〃おちゝ　大磯の妻芳子
　　五郎の坂口俊國

（下）〃おちゝ　五郎の坂口俊國
　　大磯の妻芳子
　　勢蝶の牛乳配達夫

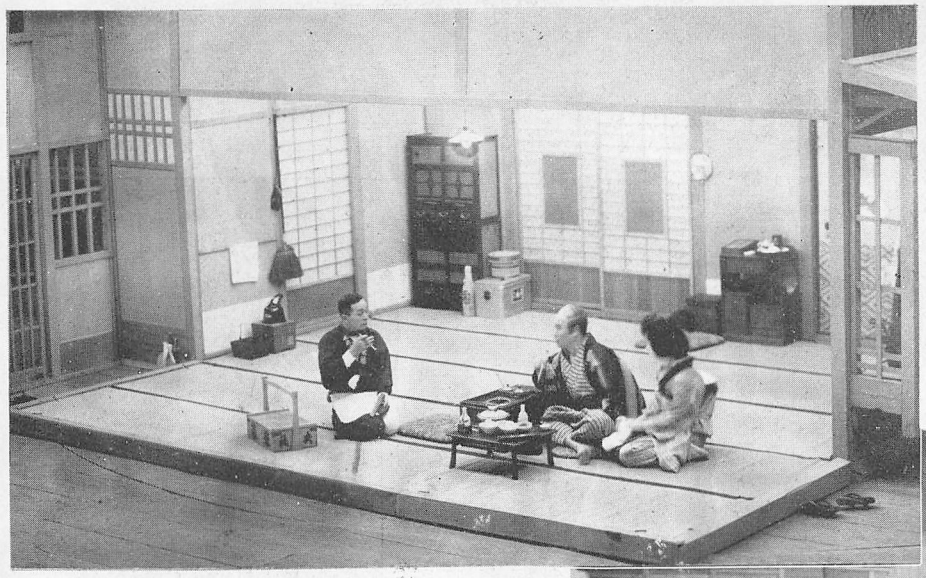
・四月の中座五郎劇二の替り・

グラヒック

〝功名愚談〟　五郎の進藤久馬
宗蝶の非人頭
勢蝶・笑將・二三丸の非人

（中）〝幸運の渦巻〟
五郎の萬屋惣右衛門
大磯の宗兵衛妻お徳
五樂の金貸宗兵衛

（右下）〝幸運の渦巻〟
五郎の萬屋惣右衛門
秀蝶の娘お秋



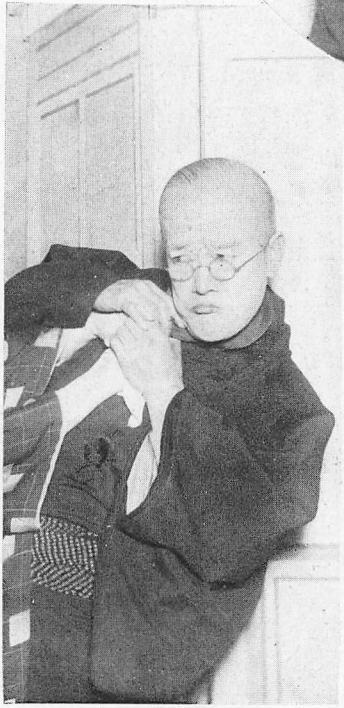
"根なし草"

桃蝶の女房お福
五郎の左官辰三
五樂の鰤鍋屋

(左下)

"根なし草"

五郎の左官辰三
小次郎の大工太吉



"朝顔の種"

十吾のビラ撒き島田
小織の門衛谷本

四月・涙花座
家庭劇

"浮浪者の娘"

十吾の母お初
圓・天外の息子章太郎

"父の場合"

小織の父善七
春日の事務員愛子
賀川の會社員水原

〝笛　角〟

石井の文童
お母の絹
〝悴太郎

四月・涙花座

家庭劇

"浮浪者の娘"

十次郎の父喜七郎
天外の悴章太郎

"スポーツ狂時代"

富士鳥の食料品屋高橋
三郎のその悴良一
三樂の運動具屋鳴尾
村田の木村の娘おせき
天照の雜貨屋木村

商
品質精選
百貨の充實
より御便利
よりお安く
奉仕第一
大阪
松坂屋
日本橋

地下鐵道開通

開通記念懸賞四千圓!!

櫻は嵐山・京都・宇治

京阪京都驛（四條大宮）西院間

京都　京阪京都驛（四條大宮）

超特急

34分

天神橋驛　大阪

割引花見切符（特賣四月中）

（細詳は運輸課へ）

神戸（十三驛連絡）大阪・京都・嵐山（ゆき）

大增發運轉

京阪電車

さくら！ 花・花・花

さくら!! 花は大軌・參急沿線

奈良公園 郡山城址 生駒

あやめ池 遊園地と直營温泉

吉野山 長谷寺 多武峯

信貴山 西から登る大ケーブル

伊勢神苑 大阪から急行二時間半 宇治山田驛が竣成しました

春は大和 伊勢路から……

大軌參急電車 ばりの 大阪上六

醫學博士宮田訂先生の驚異的發表……

腎臟病の積極的治療に

世界唯一の新發見藥

ネフリチン

各百貨店藥品部及有名藥店に有り（文獻進呈）

發賣元 石本藥園

大阪市東成區森小路町六四五

（電話東六四七八番）

宅診 午前十時ヨリ 午後三時マデ

專門

腎臟病・膽石症

無料相談 月曜夜間

訂田宮 醫學博士

宮田內科醫院

大阪市西區アミダ池電停南へ半丁西入

（電話新町二八八九番）

佛國パリー・セラミー會社製
世界的優秀化粧料カッピー化粧品

カッピー化粧料

ソロコデオ・ソヨシーローヤヘ・水香
(色各)粉白粉・水香トツレイト
(色各)紅頰・(色各)トクパンコ
鹼石粧化・鹼石りそ髭・(色各)紅口
油香・ーダウパークルタ・洗髪
ムーリク・油練・ンチンラリブ水
切一他其・品粧化・箱合取用物進

カッピー香水

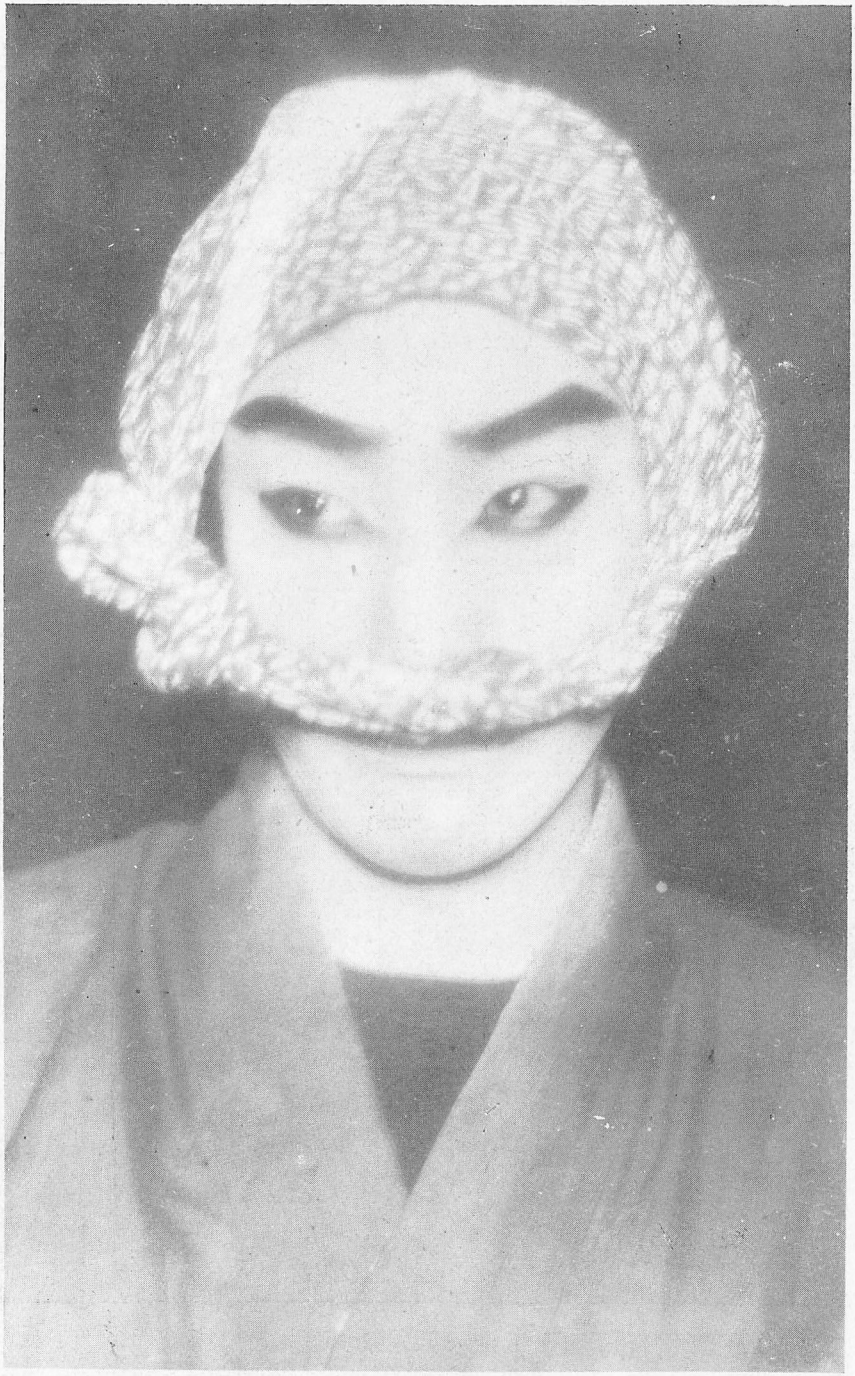
カッピー化粧料
ホスター化粧料
オワランド化粧料
ジョリスワ化粧料
輸入元

大阪 大浦彌商店

薄切にして
牛肉寶來香
松下商店 株式會社
大阪 高麗橋

劇國新・座角

"白野辨十郎"　島田正吾の白野辨十郎



角座・新國劇

"雪の渡り鳥"　辰己柳太郎の鯉名の銀平

劇國新・座角

〝雪の渡り鳥〟

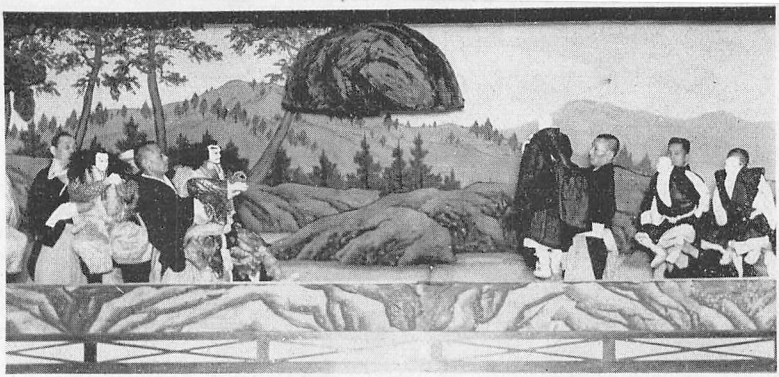
（上圖）・辰己の鯉名の銀平

〝白野辨十郎〟

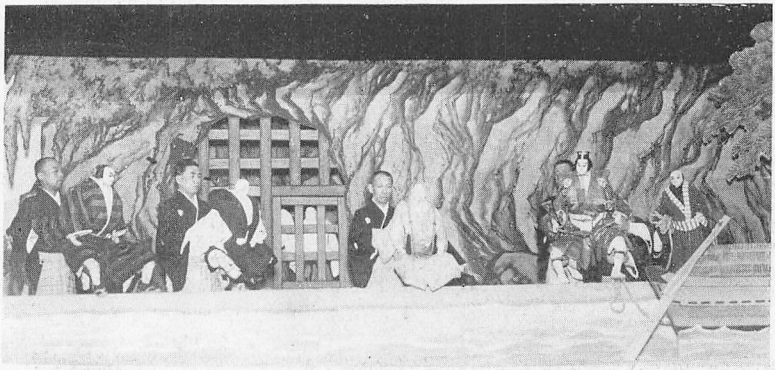
（左）・島田の白野辨十郎

（下）・島田の白野辨十郎・秋月の

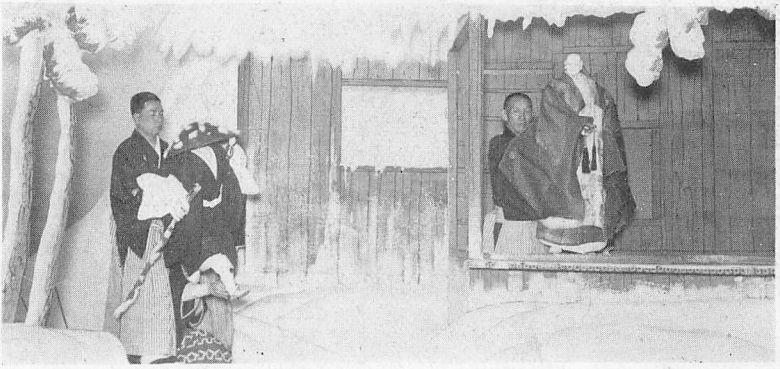
來栖生馬・二葉の千種姫



「日蓮聖人御法海」法論石の段・日蓮（榮三）



「同　上」土牢の段・四條金吾（太郎扇）日蓮（榮三）日朗（紋十郎）岩淵（玉德）



「同　上」塚原三味堂の段・日蓮（榮三）日朗（紋十郎）

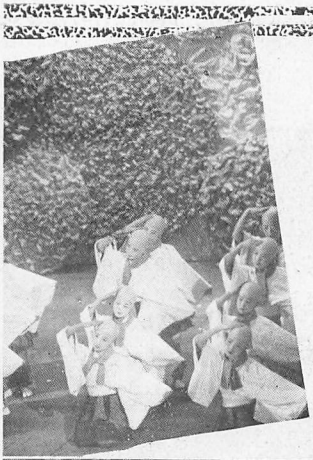
「同　上」龍の口の段・東條判官（玉幸）平塚丹平（傳之助）日蓮（榮三）

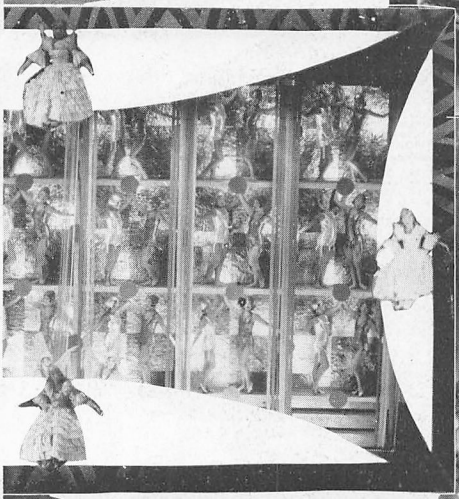
（三 榮）蓮 日 （郎十紋）朗 日 • 段の寺門本 ［海法御人聖蓮日］

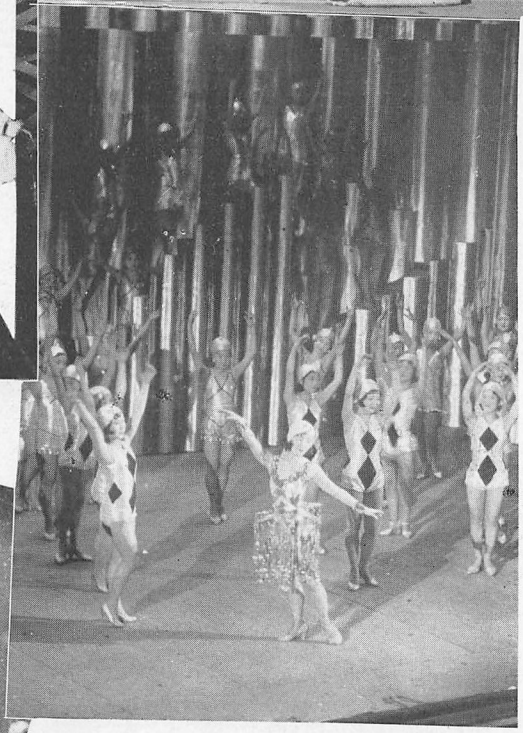
（郎太扇）衞兵傳 （吉兵小）母郎次與 • 段のし廻猿川堀 ［引達の原河頃近］
（三 榮）郎次與 （郎五文）んゆしお

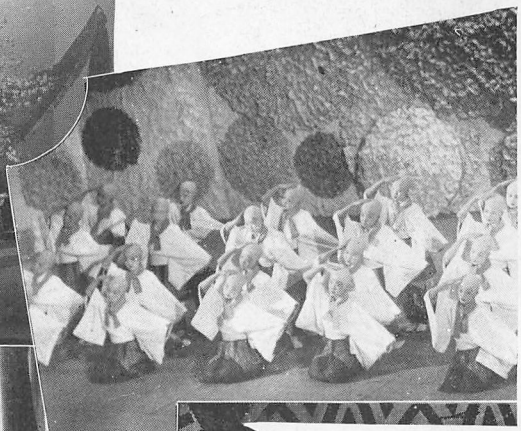
（郎五文）んゆしお （郎太扇）衞兵傳 • 段のし廻猿川堀 ［上　　同］

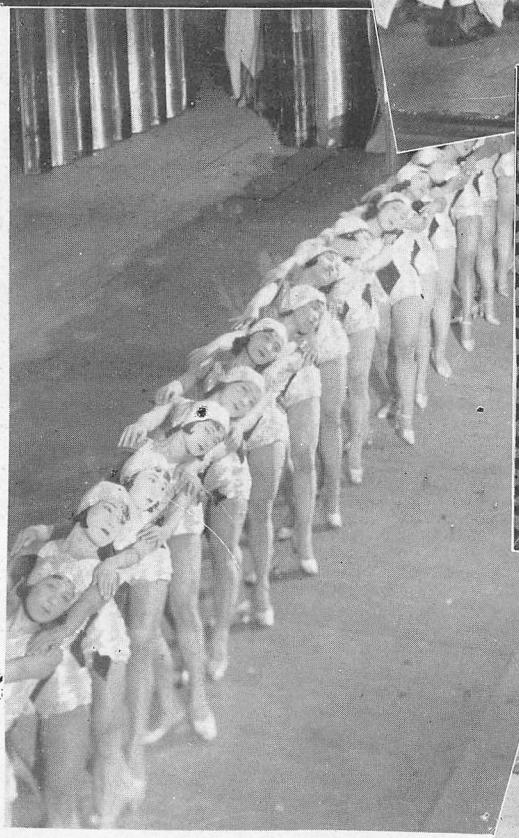
（龜 政）慶 蔀 （郎十紋）丸若牛 • 段の橋條五 ［巻略三眼法一鬼］

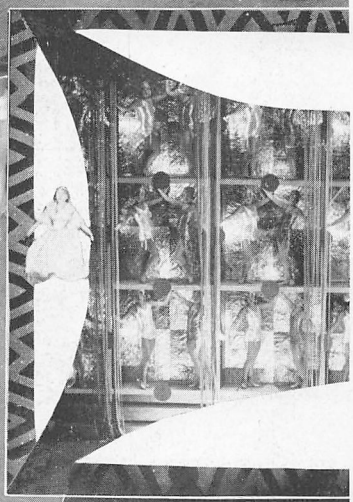


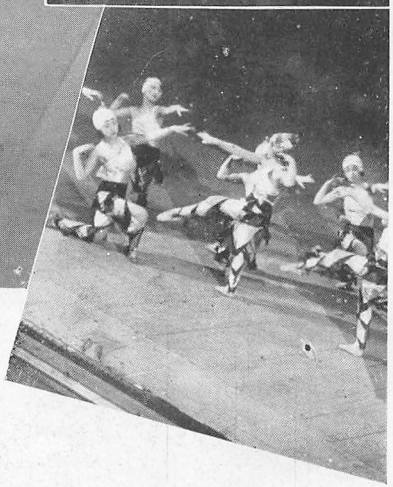












踊の中の踊・松竹ガクゲキ

春のをどり

〝八ツの寶玉〟

1. …… 琥　　珀
2. …… 瑪　　瑙
3. …… 珊　　瑚
4. …… 綠　　玉
5. …… 紅　　玉
6. …… 紫　水　晶
7. …… 眞　　珠
8. …… 金　剛　石

角座・新國劇 〃白野辨十郎〃

島田正吾の白野辨十郎
久松喜世子の千種

化粧品界の
スター
スキナあぶら取紙
皆さんに
愛用されて居る
發賣元
朝日堂株式會社
大阪南久寶寺町四
製造本舗
中田スキナ屋
大阪

松竹キネマ一九三一年度三大作品（春）

愛よ人類と共にあれ

督監郎次保津島

代絹中田　人草山上
子美惠雲八　明傳木鈴
枝靜田龍　彦時田岡

前以明黎

作原郎次佛大　督監助之貞笠衣

吉浩田高・介之龍形月・郎二長林

日本女性の歌

督監信義田池

稔田高・彦時田岡・子みす島栗

毎月一本大作品切封!!

小道具
小裂

貸衣裳

・素人演藝會・宴會の催物・
・春秋溫習會・婚禮の衣裳・

松竹衣裳部

本店　大阪市浪速區南坂町松竹ビル內
電話　戎五六三四番

東京支店　東京市淺草區並木町十五
電話　淺草五五九九番

（其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい、
御來客の御相談に應じ便利よく取計ひます）

便所の防臭に困る方は今直ぐ

藥學士　林彪太郎氏創製

印バタフ
脱臭劑
ロポア
是非御使用あれ

家庭必備品

使用簡潔
十滴奏効
無害無毒

「アポロ」ハ一つの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」ハ溶かすことがいりません、このまゝ撒布すれば宜敷いから少しも面倒でありません。

「アポロ」ハ他の藥（カンプラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦など）と異ひ化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所にアポロの臭ひが殘らぬ爲め汲取人がイヤがりません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用量が僅かですから經濟にもなります。

△使用法　一回十滴乃至十數滴づゝ（場所により多少の加減を要す）一回多量に撒布するは却て効力を減ずる事あり使用後は栓を堅くし冷所に置かるべし。

（定價一瓶小金五拾錢
大金壹圓）

到る處の藥店
各百貨店に販賣す

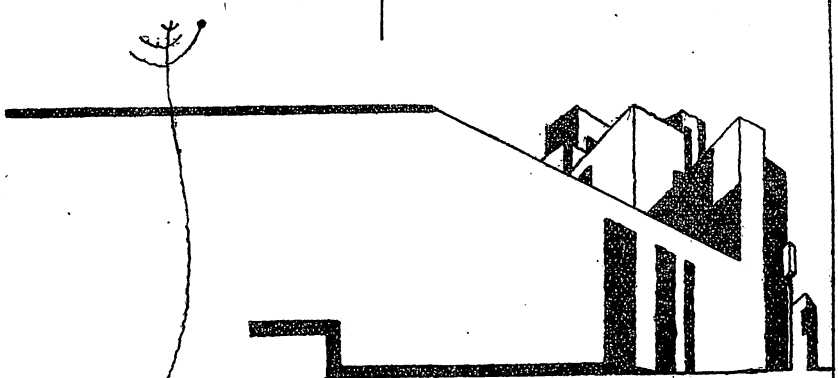
發元
大阪市東區伏見町三丁目
光榮商會
電話本局三三一五番
振替大阪三三一一七番

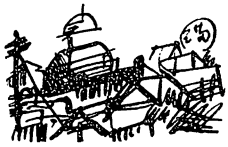
DOUTONBORY

4月

No. 55

——人生は感ずる者にとつて悲劇であり
觀る者にとつては喜劇である——





記念興行を終へて

曾我廼家五郎

「曾我廼家の二輪加」

明治年間は無論、大正年間まで二輪加と呼ばれた曾我廼家無論今でも二輪加と仰言るお方が隨分御座います。

元來二輪加と云ふものは普通のお芝居とは素性の違つた、格の下つたものとして取り扱はれて來た歴史を持つて居ります。

○

尤も二輪加は二輪加の本分であつた張りボテかづらで素顔の丸出し夫れで時のニュースを機智の笑ひで作り上げて落をつけてドッと笑わす洒落れたもの、然も旦那藝で通人でなければ出來ない味のある通なもの、和歌に對する川柳の樣に寸鐵殺笑、今の言葉で云へば尖端的なナンセスな二輪加だと思ひます。

○

宇治の銘茶で伊勢の澤庵、幾等甘味く共茶漬は茶漬、朝鮮鯛の燒物でも燒物は燒物で本膳に戴せて御座敷の眞中へ出せますが、茶漬は本膳には戴せられぬ、夫れを本膳の本舞臺、道頓堀の檜舞臺へ只の一度でも戴せて見たいと云ふ怖い無叛を起したのが私、然も宇治の銘茶でもなければ自慢の伊勢の澤庵ではないが、恰度世は日露戰爭の最中とて芝居に飢へた空腹時なればこそ偶然にも本膳に戴つて劇界の大廣間、道頓堀の大座敷へ突き出された果報物、扨て御座敷へ出られた以上元の臺處の片隅へ下げられたくない、と茶漬分際が柄にもない見得が出て、湯加減、茶の味、澤庵の切り口、無き智惠

袋の空絞りでやつと頑張つて來た三十年可成り苦しい味も嘗めましたがお蔭で矢張り本舞臺の中座で記念興行と銘打つて連日の滿員に嬉しさと恐しさにホツと一と息吐いた處です。

○

拘てお話はこれからです。サアお茶漬一トつ召上れでは大廣間へは通せませぬ、夫れでも會席料理と云ふ程の勇氣もなし素人料理のライスカレーで、其頃耳馴れぬ「喜劇」と云ふ名を何の氣もなしに借用した、空怖しい極みである、喜劇の難かしさを染み〴〵知つた私「五郎劇」なんて氣休めの名は付けて居つても矢張り世間樣は曾我廼家の喜劇と仰言る、今更揚げた看板は下ろされず自分としても一代の大事業天の使命と觀念の眼を閉じて命限り性根の續く限り笑はれない、今に本當の喜劇の天才俳優が現れて老後の思ひ出に其人の草履でもつかみたい、然して日本の演劇史に大きな喜劇の足跡を殘したい、格の下つた「劇」の樣に思はれたくないのが一期の望み、喜劇界の爲めた、ィ、ェ後年我國の演劇史を飾る爲に……英國生れのチャップリン氏が世界的の喜劇俳優と騷がれて一寸旅行してさへも各國の首相に國の來賓として扱つて貰つたり、佛國なんかは最高の勳章を捧げたり、近く我國へも來朝すると恐らく國を擧けて騷ぐと云ふ、一喜劇俳優のチャップリン氏は大陸に生れた果報者、島國ながら我が國も世界の列國と肩を並べる一等國、然も藝術の國と云はれてゐる俺が國にも早く日本のチャップリン氏が現れてほしい。

○

間に合せのライスカレーが本膳に戴つて三十年間道頓堀の本場所の眞中に頑張つて油汗を流して土俵を割るまいと持ち堪へてゐる今の内に喜劇の天才が現れて欲しいと記念興行の今日に益々其感が深くなる。

○

「喜劇」良い名である。何の劇より良い名であると自惚れてゐる。何時やら、某紙に、日本と云ふ名を外國で、ジャッパンと吐すと憤慨してゐるお方もある、御尤もな御說である。露國の魯の字は愚と同意義で不都合じやないかとあの國から捻じ込まれて露の字を使ふ樣になつたとやら、今の中華民國人にウツカリ淸國人なんて呼ばうものなら慥に異義を唱へるでせう。何だかペンが變な方へ脫線しました、元の本線へ引戻して切に好劇家各位にお願ひする、將來喜劇を向上せしめて愛撫して下さい。（完）

春と七比劇オンパレード

春の笑ひと、チャップリン――『春』の茶話――『春』と『喜劇』――

『女形』の空想――自然と喜劇――春！――

誌上出席者

曾我廼家十吾
曾我廼家蝶六
曾我廼家小次郎
曾我廼家林蝶
曾我廼家十次郎
曾我廼家大磯

（順序不同）

春の笑ひと、チャップリン

曾我廼家十吾

米國へ行つた人が、チャップリン氏に會つたが、スクリーンの上で想像して居た氏とは、全然變つた、一種寂し味を持つた人であつたと云つて居る。丈も五尺三寸弱だと云ふから、白人としては寧ろ小男の部に屬する。

氏の藝所は、何處やら、俳人一茶の、それに共通する。氏の東洋的宿命觀は、最近に至つて、益々、氏の映畫の上に、濃い色彩を印して來た。朗かで澄み通つた明るさの中に、しみ〴〵と滲み出して來る寂寥。無口であると云はれる氏の藝術の中に、明快な春が豫感される。

○

私は、氏の映畫の長巻物を、餘り好まない。寧ろ、氏が、キーストン會社、エッサニー會社時代の作品たる、二三巻物に、より多くの親しみが持てる。

一時、全世界を熱狂させた「ゴールドラッシュ」が、成功したと云つて、直ぐ「サーカス」七巻の長尺物を公開したが、之れは、明かに失敗であつた。世間で、案外な不評を聞いて、氏は愕然としたさうだが、次回の製作「街の灯」の上に、目下非常な危惧と惱みを感じて居る噂である。とまれ、サーカスは、無理に長巻物にする爲めに、氏が、大正四五年頃、公開した「道具方・舞臺裏」、「失戀」等の、張り雜ぜ、綴り合はせだと思はれる場面が、隨所に見え透いた。

○

何故、氏が最近、さうした長巻物を製作するのであるか、私は判斷に苦しむ。私は、氏の五六巻以上の物は、見度くない。

それと同じ樣に、私は、氏と女の關係に於ても、さう云ふ感じがする。氏が、女との關係の短いのも、私は咎め度くない。俳人一茶が、戀女房、雪女と別れた時。

へちま蔓　切つてしまえば　元の水

と詠んだやうに、自力で、何處までも、女を追はうとしない一種の淡泊さ。一茶が、直ぐ又、新しい嫁を迎えた樣に、氏も亦直ぐ、ミルドレッド、ハリス。リタ、グレイ。エドナー、パーヴイアンス、ポーラ、ネグリ。ジョージア、ヘール。ヴアージニア、チエリル等の名花を、次々に戀人として持つたが、之れは、決して、氏が女を玩弄物視して居る證左にはならない。その證據には、氏の作品について考察して見やう。

「サーカス」に於て、娘マーナに戀して居たチャップリンが、マーナに綱渡りレクスと云ふ相思の愛人があつたと知ると、未練氣もなく、自分の戀を諦めて、アテドない旅に上ると云つた樣に、又「黄金狂時代」に於ける、唄女ジョージアに對する彼の戀の諦め、又、「サンニーサイド」に於ける、娘エドナーに對する同じ諦め、又「掃除番」に於けるタイピスト、パーヴイアンスに對するそれ、又「失戀」に於ける、令嬢エドナーに對する諦め等々の如く、決して自分の意志の下に、女を束縛せず、何れの場合も、女の自由意志に委せて、自分は戀を諦めて、その店を出るとか、當度ない旅に上るとか云ふ風に、極く善良な手法を用ひて居るのでも判る。そして、散る花の樣な、寂しい笑顔と、滑稽な後姿を、ハッキリ觀者に印象づけて、ラストシーンに宿命的な餘韻を送つて居る、あの手法が、氏の藝術卽氏自身ではなからうか。

○

寔に、氏こそは、春の樣に、明かに、洗練された機智と皮肉の笑ひのうちに、風教を洗滌する、影の藝術家、無言の藝術家、近代稀に見る、得難いコメデアンである。

今や、氏は、歐洲訪問旅行を終えて、近く我國來朝の外電、頻りに至る。一日も早く、氏の風貌に接し度いと希ふ者は、強ち私一人ではあるまい。

『春』の茶話

曾我廼家蝶六

A

ツイ先達て、梅がチラホラ舞ひ落ちたかと思ふ内、もう春も中ばへ來てしまつた樣です。其の春に囚んでのナンセンスを何か書けとの御依頼に關して、イザ考へて見るとサテ何を書いたものやら……あれかこれかと迷つた揚句、臘味噌の隅にあつた一つ話を探り出して、まアお話しいたしませうか……

B

其の年の花見の人出と言つたら、イヤモウ大變なもので人の山に櫻が咲いてゐるやうな有樣でした。此の春を目指した祇園の都踊りが例に依つて例の如く、櫻以上の人氣を呼んで不景氣糞をくらえといふ盛況さです。

或る日のことです。私も春氣分に浮かれ出して、ブラリと見物に出かけたものです。

丁度二回目あたりが終つた處で、次の入れ込みが始まつてゐる。長い廊下を傳はつて行くと、御手まへ席にはそれ〴〵大勢の人が將棋の駒の樣に四角張つて位置についてゐます。あの氣持ちは又何んとも言はれぬ味がおますな。正面には雛人形の樣に美しい舞妓が謹ましく坐して、今正におてまへの作法が始まらうとした時でしたアタフタと驅け込んで來た一人の男がありました。そうだんな、年の頃なら五十過ぎと言ふ處で、キチンと折目のつッ張つた紙子の樣な着物を着て、白ちりめんの兵兒帶に狂犬をつなぐやうな、えげつなく太い銀鎖を卷いてあたりにプン〳〵ナフタリンのにほひをさした一見それと知るお上りさんだす。

廻りをグルッと見廻したが、やがて空いてゐた席へチョコンと腰を下しました。それが又なんと正客席だんがな。その内にうす茶が運ばれキチンと其の人の前に置かれました。するとお上りさんは眼をキョロ〳〵とさせて隣の人を振り返つて、大聲に言つたものです

「わてはは後で結構だすよつてあんさんお先へどうぞ飲んどくれやすな……ねえはん構はんと次に廻しとくなはれ、わては後から貰ひまつさ……」其處此處で忍び笑ひが起ります。お上りさんはユデ蛸の樣に赤くなつてゐました。氣の毒と思つたか隣に居たお人が色々と教へたりして、まアお上りさんは飲む事にきめたらしく節高い手で茶碗を握ると、ガブ〳〵うまそうに呑んでゐましたが、やがて茶碗をつき出して、

「ねえはん、すまんけどモウ一杯お代りを頼んまッせえ……」

その内にどうやら此處を出て、間題の都躍りの幕が明きます。正面に陣取つて盛んに溜息をつき乍ら見物してゐたお上りさんは、やがて踊りがクライマックスとなつた時、感極まつてか悲痛な聲を振りしぼつて大喝一聲！

「祇園屋ア――」

C

ウソの樣なこれは本當の話です。

今思ひ出しても可笑しくなつて、時々思はず吹き出して來ます。今頃は此のお百姓さんも、此の失敗を何處かで思ひ出してゐる事でせう。

（一九三一、三、二五、）

『春』と喜劇

曾我廼家小次郎

○

春！

そして……

笑ひ!!

それは薄紙一ト重への、隣合せだ。

秋が來て、妙に浮れ出す馬鹿もなければ、春が來て、氣の沈むケタ外れのお人も見當らない。春は陽氣で、秋は陰。これは昔からの通り相場だ笑ひは陽氣の、シムボルである。

○

さて。固苦しい序文がすめば春は花、笑ひと陽氣のオン・パレードで「春」と「喜劇」のデュエットと、酒落れやう……

紅色のネオンライトが、春めかしい蠱惑的な瞬きで、惱ましいイツトを發散してゐる。陽氣はポカ〳〵してくるし、フトコロは、貰ひ立ての月給袋でぬくもつてゐるし、イツトにあてられた哀れなる「彼氏」は、フオツクス・トロツトの音律に浮かれてキヤフエー・××の門をくぐる。光と、紫煙と、さゞめきと、赤い悪魔は、盛んに毒氣を吹きかけて人間のなまこを拵へてしまふ。一杯のマンハツタンは、やがて二杯のミリオンダラーを、そして三杯目のリキユルは四杯目のジンと、テーブルに並んだワキングラスを次々にふやして「彼氏」はスツカリ蕩然といゝ氣持になつてしまつた。斯くて月給袋の封切りは、忽ちに中身を輕くして、尊い金は五色の酒に變り五色の酒は嚥て薄黄色な液體と化して、體内の一部分から無雜作に排泄してしまふのである。

これが一ケ月間肉體勞働の結晶のキヤタストロフ。そして醉ひの覺めかゝつた彼氏の頭には、三ケ月間滯納した家賃と、洋服の月賦と、米代と酒屋の支拂ひと、……etc、etc、請求書の山積みに、苦しい彼氏の言ひ譯する醜態とが矢の樣にかすめ去る。彼氏愕然と飛び上つたが、使ひ果した金が舞戻つてくる譯もなし、仰げば空の滿月が意氣悄然たる彼氏の姿を見下してゐた。彼方に明滅するネオンライトは變りなく、春のイツトを投げてゐる。オ、恨めしの道頓堀よ、……彼氏はやがて諦めの呟きを洩らして曰く、

「仕方がネエ、これも「春」だ……」

○

「ネエ貴方、妾去年もキンシユクで我慢したんだから今年は春衣をこしらへてネエ——」

「ダツテお前、春衣を其の上こしらへてどうするんだい？」

「アラ、お花見に行くのじやないのオ……」

「まア仕方がない、何んでもこしらへなさい……」……

月給袋の大部分が飛んで、愛する妻君の春衣が出來上りました。サテ新調の春衣で何處へ行かう？　あれかこれかと迷つた揚句、吉野山と決まつて若き新婚の夫婦は、共に手に手を握り合つて、公然

のランデヴーとしやれこみました。サテユックリ滿開の櫻花を樂しもうと來たのに、折柄の小春日和で出盛る人の波、波、波。押し合ひへし合ひ、クシャ〳〵にもまれて、這う〳〵の態で無事に歸宅。互に怪我の無いのを祝しましたが、新調の春衣は見るも無慘、哀れやツゞレの春衣と化してしまひました。かうと知つたらよせばよかつた。而し、このボロ〳〵の破れやほころびが、嘆じて元に戻るでもなし、其處で夫君の呟やいて曰く、

これも「春」だ、仕方がねエ……

○

サテ、皆さん。一日の春の行樂に、賢明なる諸彦諸姉は、果して前者を選びますか、それとも後者を選びますか。

否、否。それは、樂を求めて苦に落ちるといふ言葉に適切です。

然らば春の一日を、何うして送ればいゝのだらう「春」と「喜劇」は薄紙一ト重の隣合せ。此處で有りふれた言葉を借りやうなら、春は笑ひのシーズンです。浮き立つ春宵の一夕は、中座の曾我廼家五郎劇へ、原稿の一行を厚かましくも廣告に借りて、何卒御趨し下されかしと謹んでお願ひ致す次第で御座います。

『女形』の空想

曾我廼家林蝶

I

女形！

完全なる男性が、メークアップと技巧とによつて、完全なる女性になりすましてしまふ。其處に拂はれる「女形」の苦心なるものは音聲、歩調、こなし、扮裝、其他日常生活の精密な點まで、到底吾人の計り知れぬ注意と苦心があるものです。

それが單なる舞臺上のみの「女」ではなく、日常に置いての「女」總ての點に置いての「女」といふ氣持になり得ねば、到底「女形」としての資格はないだらうと思ふのです。

男子として生を受け「女」として生きて行く我れ〳〵にとつて、當然其處に現實を離れた、理想も空想も湧き上つて來ます。

「女形」の理想、或ひは空想。それはどんなものか？ 私は決して「女形」全部がこうした空想に生きてゐようとは、言ひ切りませんまあ、私自身の空想としてお聞き下さい。

II

春！ そして大大阪のアーテリーに流れる、道頓堀の人、人、人そして押しかぶさつた夜、夜、夜。やがてカフエー街が活氣づいて鼻の下の長いセックスデヴルの出現になります。彼等のヤニ下つた目尻が往來するあらゆる女性の全身へ、意味深いモーションが投げられるのです。其の頃でした。

分厚いフエルトの草履で、輕くペーヴメントを踏み乍ら華やかな長振袖をヒラメかして、クキンの如く現はれた女性があります。オ、その美しさ、あでやかさ、道頓堀に流れた甘い色蹟共は忽ち磁石に合つた粉鐵の如く引きつけられて行きました。振袖の女性は盛んにイツトを投げて、彼等の内の最も甘そうなのを釣り上げました。

やがて彼は「お茶は？」と來ます「エヽお供しますは……」やがて連れ立つた彼と彼女の姿がレストラントに現はれて、華美の限りをつくされたスペッシャル・ルームに通されます……幾分かの後、デレ〳〵に醉つ拂つた彼はいよ〳〵狼の本性を現はして振袖の女に囁きました「ボク、貴にネツレツな戀を感じました」すると彼女は恥かしげに「まア御冗談ばつかり……」「イエ本當です、それは僕の首を差し上げても……」

彼は自分の口から出た言葉の確實性を示す爲めに、仕樣もないガン首を叩いて言ひ切りました。

「まア……妾も……よ。

「あゝ嬉しい、僕感謝します。そこでネエ、マドモアゼル。あなたホテルへ如何です。」男は最後の要求を迫つたとします。すると突然ハネ上つた彼女は節太の平手で男の横面をイト痛快にピシヤリ。

「アツ！」と言つて立上る彼を、逞しいアンヨで蹴り上げたからたまりません。コチコチな床へ、したゝか男のガン首がバウンドしました。其處で彼女は大聲に言ひました。

「見損ふないバカヤロー、こう見えても俺樣は女じやねえ「女形」だぞオ……」

Ⅲ

イヤモウ飛んだ空想を抱いたもんですネオホ……。

（六・三・二五）

『自然と喜劇』

曾我廼家十次郎

春!!

から云ふだけでもデリゲートな蜘蛛の絲が身體一杯卷きつける。一寸むつかしい餘り私自身が口にしない言葉を引張り出してくると春は醫學的にも經濟的にも、××的にも多角形な變化を來して來る……地球の廻轉が春を色づけてくるとあらゆる人間が自然へ〳〵と讃美の聲を擧げつゝ飛出して行く、郊外ナンセンス……エロじやとか、グロじやとか、アライツトだわネとか、が天然色フイルムに映し出される、晝夜兼行の笑ひとどよめきの中に人々が亂歩して行く……只私はこうした中に居てほんとに痛感せざるを得ない。そんな人々を此上のう羨ましく思ふ、私なんか朝から人の寢る時間迄俳優と云ふ妙な生活に縛られて春の光を見ることが出來ないとてもやりきれない考へ出すとムシヤクシヤする、こんな時に最もよきベタハーフに相談をしてみる「でもしようがないワ、それが商賣なんですもの」こう云はれる全くどうにもならないこつた、春が訪れてくるカビの生へた人間迄新しく生々とした氣持に甦へつてくる、この自然が人間に及ぼす影響は見ようによつては喜劇的な要素を多分に持つてゐる、戀を語らふのも……この春に限る、寒中に火の樣な戀を語つても大してありがたいもんでもないと思ふ人間の樣々な樣式は春によつて最も露骨に表はれて來る、私なんか春になるとワ

ツト騷ぎ廻つてみたいとてつもない野心が飛び出して來る、春はと完全にボートしてしまふこう天氣のゐゝ日なんか一日飛び出して何も彼も私にとつて喜劇的なジャズの樣に思はれてならない私共が一ツの技巧を出來るだけ自然的に見せて人樣を笑わしてゐるけどこうした笑ひ以上の笑ひが何處にも彼處にも春の野外ステージに飛出してゐる。

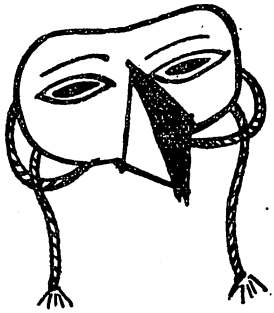
（六、三、二四）

春！

曾我廼家大磯

春……ピクニツク……花見……運動會……などを聯想して一般の人が中々芝居へは顏を寄せない、此御難月の四月には毎年例の樣に中座へ出勤して居るが可成りの成績を擧げるには中々の苦戰で有るので座長五郎師は云ふに及ばず一座の者は獻身的で有る、その御蔭にや毎年相當の成績を納めて居る今年は珍らしく一ケ月早い三月興行に出勤した。處が近年稀なる大入で二の替はりを出さず一ト狂言で二十五日間打通す事になつた、之れは我が喜劇界に一大記錄を殘したと云ふもので有る、今年の一、二月は東京新橋演舞場で二ケ月間打通して大入を占めて東京劇界の人を驚かした。去年の十二月も中座で二十三日間狂言を替へずに打通した、此通り時期の悪い時の興行でもいつも大入をする、自慢じやないが喜劇にはシーズンはないものか知らん……イヤそうでない興行の成績は別として觀客にも出演者にも時期は大ありで有る、春だのにあまり陰氣なじめ〳〵した暗い狂言は失敗で有る。觀客の心も春は浮立つてゐるから狂言も華やかな物でないと觀客の頭へピツタリ來ない。興行者側は第一に狂言の選擇が肝心で有る、其點は我が一座はいつも成可くシーズンに適する樣に五郎師が心を配つて狂言を立てられるからシーズンに合はぬと云ふ事は餘り少いそれがいつも大入をする所以であらふ。此の點は他の劇團はうまく行かんらしい夫れはなぜなれば俳優の組合せ又は役割の關係上甘く行かぬらしいやうに思ふ……此頃會社や商店又は工場が運動會や觀櫻會を廢してその變り觀劇會を催す事が流行して來た。或る會社の社長さんの御話に依ると花見に行つて酒に醉つて怪我をしたり友達と喧嘩をしたり翌日は二日醉で會社を缺勤する、さもなくば歸りに花柳界へしけ込んで家庭の圓滿を缺く位ひが落ちだから夫れよりは喜劇でも見て笑つた方が安全でいゝと云はれました……かう云ふ事を聞くのは我々にとつては福音である、斯ふ云ふ社長さん、店主さん、工場主さんが澤山出來る程喜劇界は萬歳である……爰迄書いて來てフーツと氣がついて見るとこんな事が春と喜劇に何の關係が有る何の事だか自分でもハツキリ判らぬ辻褄の合はぬ事をダラ〳〵書いて仕舞つた、此方が餘程喜劇だ、之れを讀まれる讀者諸彦こそ御氣の毒千萬だ御許しあれ……ソレ爰が卽ちア、春は惱まされるものよ。

（三、二四—中座樂屋にて）



・・文樂座四月興行・・

新作塚原三昧堂に就て

食滿南北

新作と銘を打つ方がいゝのでせうか。それとも舊來からあつたやうな態度で知らん顔をしてゐるのがいゝのでせうか。

私は、津太夫氏から頼まれて「日蓮聖人御法海」の佐渡塚原三昧堂の段を書卸すに就てかう云ふてわが社長にはかつたのである。

「サア」社長も亦ちよつとは迷はれたらしい。

どつも淨瑠璃の「新作」なんていふものはさう有難いものではない。

ましてこの佐渡など云ふものは可なり芝居なんかでは演りつくしてゐる。今更らしく「新作」など云ふのは氣耻かしい氣がする。しかし全くの新作なのだ、高祖遺文錄から佐渡の御消息をあちこちひろひあつめて全く新らしく作つたのであるが精神は、宗祖上人の意に反いてゐないつもりである。しかも淨瑠璃の約束をキツカリ守つてゐる。だから新味があるとは思へぬが、聖祖の敎旨には斷然違つてゐない、だから際つてその前段に描かれてゐる日蓮上人と私の描いた日蓮上人とは何處かに一貫しない點があるかもしれない。

私はかつて田中智學居士の門人であつた。さうして智律日整といふ名まで貰つてゐる。私は何だか昔の私にかへつた心持で近頃眞面目な心持でこれを描きあげたのである。すべてが淋しいので、二童子を出さうと云ふのは津太夫氏の意見であつた、さうして友次郎氏はお上人お上人しないやうに「文彌」で行かうと語つてゐた。私はこの文を艸する時、まだ其語り口は聞かなかつた。しかし五十分餘もかゝると聞いた時實際びつくりした。私は高々三十分位のつもりで描いてゐたのである。だが床本を見た時に大分にあるなと思つた。

幸ひに將來「日蓮聖人御法海」を通して語る時必らずこの「佐渡塚原三昧堂」が中心になる樣ならば、望外の幸福である。

準備時代より躍進期へ

新國劇代表者
俵藤丈夫

「隨分、大變だつたらう」
「もう新國劇も、大丈夫ですね」
「こゝまで漕ぎつけたら、もう安心だ」
この間、觀覽税撤廢の問題で、東京劇場協會の集會が東京會館で催された時、私も協會の一員として末席に列したが、その席上で、會長の大谷松竹社長や、各劇場關係の御歴々から、私はかうした慰撫やら激勵やらの聲をかけられた。私は何かしら、うそ寒い氣持でそれを聞かねばならなかつた。想へば、澤田座長を失つてから既に二年の年月が流れた。それは思ふも恐ろしい暗と嵐の旅であつた。
一座の指導者として、こよなき統率者として、また劇界稀なる天才兒として素張らしい人氣の所有者であつた、その名座長を失つた一座の運命を、誰か樂觀視した者があつただらうか、事實、危つかしいものであつた。
どうしてこれが保てやう。——激勵の言葉の裏には、常にまた悲觀の囁きを聞かぬ日はなかつたのである。それほどにも困難な一座の經營であつた。
そればかりではない。現内閣の緊縮政策は、世界的財界の不況と一致して、近來稀なる不況時代を現出し、名船長を失うたばかりの未熟な新しい舵手には、あまりにも世の中の波が荒すぎたのである。百名に近い乘組員——座員の生活を背負うてゐた舵手の私は、たゞこの乘組員の安泰のために、專念それのみを考へて、荒れすさぶ航路の闇を、ひたぶるに突き進んだのみであつた。
さうした難航の二年であつた。或は今日あることすらも奇蹟だつたか知れないほど——全く以て、今日迄の二年の旅は、浪と風とを懸命に防ぐ、死守防禦の苦闘に盡きる。言ひかへれば、「新國劇」てふ看板を保持して、團體今後の進軍に備へる防禦と準備の日であつた。その今日の新國劇を評して、座長死後見るべき進境なしなどと云ふのは、それは無理な注文である。積雪の下を忍んで、根強く生命の力を保持して來た更生の若芽であれば我々は充分だつたのである。
ほんとうの仕事はこれからである。
私は絶えず考へて來た。あれほどの天才座長を仰いでゐた一座だ。これを持續してゆくためには、是非とも三ケ年間を基礎時代、準備時代と覺悟して、新しい

出發に還らねばならぬ。が、たゞ、劇團經營困難の此の際、しかも長年の大黑柱を失つた一座が、果してよくその準備時代の經濟的存續に堪ゑ得るや否や、問題は寧ろそこにあつた。幸に、その準備時代も漸く三分の二を了へて、あと一年が殘つてゐる。我々はこの過去の二年間些の怠慢もしなかつたし、今後の殘る一年間も、矢張り同じやうな、苦闘の基礎時代、準備時代を續けるであらう。

一見、澤田座長歿後、進境を見ずと見做さるゝ我が一座は、その内面に於て如何に着々と、次の時代の飛躍に準備し努力しつゝあるか、私は今、只それのみに向つて全心を傾倒してゐるつもりである

若き俳優の養成に就ては、既に大方の知らるゝところと思ふ。回顧すれば二年前の今月、澤田座長歿後最初の大阪公演の時、まづ私たちが試みた仕事は何であつたか。「新進拔擢公演」——この大膽な試み——これこそ實に、この二年を着々の準備に進まんとした私の何よりの意志表示であつた。當時、拔擢されて主要の役を演じた若芽が、その後如何に伸びつゝあるかは、今更私が言を贅するまでも無いであらう。この間私たちが精進し初演した新作狂言の數五十餘種——。

準備は斯うした表面のことばかりではなかつた。今後の演劇は、俳優の技量とともに、これを統一し、これを援助する補助機關の完成に俟たなければならない演出、効果、照明、さうした方面の完備によつて、あくまで統一された理想の舞臺を現出しなければならないことは私も知つてゐる。

私はこれがため、既に一人の文藝部員を獨逸に派し、乏しい財布の中身を割いて、彼の地に於ける演劇内部の實狀を見學させてゐる。それは大學で机上の演劇論を研究して來るのではなく、親しく職業劇團の中へ入つて、大道具、小道具、照明、効果など、演出各方面の實際を修業させてゐるのである。近々歸朝の曉には、その新智識は必ずや、一座の舞臺に輝いて著しい演劇の進境を來すことを信じてゐる。このA君が伯林から歸つて來たら、今度は更にB君を亞米利加へ渡らすつもりである。B君が歸つたら又更にC君を佛蘭西か露西亞へ、斯うして次から次と、世界の新智識を集めて更生新國劇の使命を全うするところに、日夜の望みをかけて、私は働いてゐる。

それかあらぬか、澤田座長歿後最初の大阪公演の時、私たちは、我が劇團のマーク「柳蛙」に因んで、若苗の柳百本を大阪市に寄附し、中の島公園にこれを植えつけて置いたが、その柳の若苗は、もう數へ年三ツになる。この若柳と共に生長してゆく我ら若人の更生新國劇。——私は、大阪公演の都度、必ず一度この柳の生長を見て樂しむことを忘れないのであるが、分けても今度の大阪公演に際しては、いつの間にか、もう三歳になつたそれを見ることの出來るだけに、一トしほ私の心を躍らせる懷しさと樂しさとが存してゐるのである。（六年四月）

『白野辨十郎』上演に際して

島田正吾

――白野辨十郎――それは私達にとつて、何といふ懷しいひゞき、この名前を見るとき、口吟むとき、恰も子が亡き父に對するが如き感慨がその呼名の奥に息づいて居るのを覺えます。單なる芝居の表題とは思へぬ呼名。――十月十六日、夕食前白野辨十郎氏暗殺さる――未だに殘る故先生の名調子、嘗ては全國に上演されて、劇界に異常なるセンセーションを捲き起し、故先生の至藝の一つとされた白野辨十郎。其の當時無名の研究生として、太鼓叩きの一兵卒を演つてゐた私が、先生歿後二年の今日、一躍主役白野に扮して新國劇搖籃の地、道頓堀に、恩師の俤を偲びつゝ、晴れの舞臺に立たうとは……何といふ感慨無量さ――思ひ起す大正十五年一月一日、邦樂座白野初演の初日、萬雷の如き賞讃の拍手の裡に、大詰金光院の場を終へて樂屋へ入つて來られた先生が、流るゝ汗を拭き乍ら、

「他の芝居の眞似手はあつても、此の芝居だけは、恐らく眞似手はあるまい」

と、如何にも滿足そうに微笑を浮べながら、私に話されたことを覺えて居ます。

前半、詩と諧謔のユーモラスト白野・後半悲戀悲想の極致白野・常人の企て及び難い演出を見事完成された所に故先生の偉大さが在つたのではあるまいか。運命は今その白野に自分が扮しなければならない立場に私を置くことになりました。

地下の先生、果してどの樣な微笑みで私を見つめて居られることでせう。

大詰一幕は、先生歿後數回、一度は一昨年九月、受難又受難、苦のどん底に落ちた新國劇が、決死の陣を張つた大隈講堂の四日間に原作の儘、シラノ、ド、ベルジュラックとして上演、この當時の私達の血と涙と汗の辛酸、此れも今度の白野上演に際して忘れ難い、苦い、併し今となつて見れば懷しい思ひ出の一つであります。

次で昨年五月、道頓堀角座に更生新國劇第一回御目見得として公演、相當の好評を得ることが出來ましたが、全部を通して上演するのは、今度が始めて――希望に伴う不安、併し臆せぬ精進に感激の胸をふるはせつゝ、故先生の力强い演技を思ひ浮べながら懸命に研究して居ります。（昭和六、三、二夜）

春のぞよめきを他所に

辰巳柳太郎

大阪に歸るといふだけで總身の血が湧き立ちます。

私達更生の新國劇が悲境のどん底に美事耐えて、再生の意氣もの凄く旗幟を振りかざして大阪へ現はれたのが去年の五月。

まだ幼若の私たちではありましたが只管の御鞭撻によりまして、次々と度を重ねてのお目見得が出來るやうになりましたことを喜んで居ります。

公演四回——夢のやうな想ひでのこの一年の多事多端を回顧してゐます。

春は花、たゞなんとはなしに心浮き立つ朧夜の夢。ながい冬眠から春の芽ざめにぞめき立つこの四月に歸阪公演とは、大阪と新國劇が切離せないやうに私個人にとりましても亦、永劫にきりはなせない良緣だと思はれてなりません。

同僚と、もにひとしく苦しみぬいた私です。この一歲の終末を春日のどかな大阪に存分、狂躍する覺悟で居ります。

それもそれ、その春の日のざわめきをひとつに引締めて、舞臺中心の精鋭化。ボカ〳〵となま暖い椽側に惰眠を貪る心の疲れをしつだする警鐘ぐらいには役立つかと思ひます。

今年劈頭の初春公演には思ひがけぬ病魔に侵されて、日限なかばにして心焦れど自由のきかぬ病床にたほれ、不本意な休演に身をさいなむ思ひをしました。皆さんの御期待にも添えなかつた我身に集るかず〳〵の御厚情を想ひますと、今日もなほ感謝の念を禁じ得ず、感激の血のほとばしるものがあります。

春を迎えて健康も舊に倍し、溢るゝばかりの元氣になりました。捲土重來も可笑しいが復報の心は熾んであります。

やがて來らんとする活躍の前の靜けさよ！

梅花散る東都の一角で、いまわたくしは、今度振られた新役の銀平の演伎を練つて居ります。

長谷川先生作の「雪の渡り鳥」の銀平。思ひなしか彼の人生記には自から涙がもよほしてなりません。

蘇生した辨十郎

額田六福

澤田君が歿後、彼が殘した傑作は、中井、島田、辰見等の手で、大部分は繼承上演せられたが、彼の傑作中の傑作である雲右衞門と、坂本龍馬と、この白野辨十郎丈けが、いまだに復活の手を染められずにあつた。いゝものである丈けに難ケしいからである。それが今度他の二名作に先達つて上演された事は自分としては今年に入つての第一の歡びである。

澤田君の死後、辨十郎は一度公園劇場で明石潮の手で上演されたが、稽古不足で殆ど見るに堪えなかつた。月形龍之助君の映畫は、可なりよくまとまつてゐたが、それは別である。

島田君の辨十郎は、一度ラヂオで大詰丈けを聞いた。澤田君そつくりで、別な意味で思はず泣かされたものだが、それは一場丈けであり、聲丈けであるので、舞臺上の効果は判らなかつた。

今度東京の新歌舞伎で上演されると聞いた、自分はその意氣を壯として、大いに聲援したが、扨ていよ〳〵初日を見る迄は實に並々でなく心配であつた。若し失敗したら彼に對して非常に氣の毒至極なことになると思つたこれは主事の俵藤君にしてもカントクの青木君にも同樣だつたと思ふ。

しかし、初日の結果は實に案外であつた。

或る者は云ふ、「それは單に澤田の模倣だ」と。しかし、模倣結構である。少し突飛かも知れないが、團十郎を眞似る事が許されるならば、新劇の第一人者であつた彼澤田の藝そのまゝの數奇が行はれてもいゝと思ふ。澤田君の昔を知つてゐる者には思ひ出の種であるし、話のみきいてゐた人々は故人の面影を偲ばせる丈けでもうれしい事である。

しかも、原作の妙はそれ等のハンデーキャップをのけ

ても、十分に彼島田によつて殆ど遺憾なく現はされた東京での評判は自ら傳はつてゐるだらうと思ふので、敢て詳細にわたらないが、とにかく一見して貴ふ値のある辨十郎である。

千種姫は四幕目迄、早苗孃がやる。久松君が病苦を堪えて一生懸命に敎へた丈けに、よく出來た。四幕目が殊にいゝ。大詰は久松君が自身で元の通りに演出した。以前よりもずつと落つきと自然の淋しみとが出て、幕明きの邊殊によかつた。山路君の尼も一層上品だつた。

栗栖は初演からの持役で論なし。雷藏も同樣「春夜や蛸の足」で相變らず笑はしてゐる。

秋月君の村瀨もいゝ。殊に大詰がいゝ。小川君の土佐守も若之助よりは人柄に見えた。

辰見君の朱雀隊士も輕い役を十分に氣を入れて舞臺を面白くしてくれた。若しそれ、金井、中井二君の宗匠は何よりの御馳走だ。

道具も三幕目と四幕目とが新工夫されて前よりよくなつてゐる。四幕目がが殊によい。

「戰場と云ふものがこんなに荒れ果てた處とは思ひませなんだ。」とある、千種のせりふが實によく生きてゐる。

とにかく凡てにおいて作者は滿足である、恐らく諸君に於ても滿足されるであらうと考へる。是非後援を期待したい。（故郷にて）

拜復

春調はんとする折柄益々御清榮の段大慶至極に存じ上げます。

さて御申付の原稿の件誠に勝手では御座いますが病後のことでは御座いますし、又の機會に責を果させて頂き度く今度は失禮さして頂きます。懷しい道頓堀！　若い元氣一ぱいの人達と例へ一幕だけでもそこで舞臺を踏めるといふことを只もうこの上なき喜びと存じます。

どうぞ下阪の節はよろしく御引廻しの程御願ひ致します。　不備

久松喜世子

道頓堀編輯部樣

角座新國劇上演・長谷川伸作

雪の渡り鳥

二幕六場

一

天保九年初夏の宵

伊豆下田の町から少し離れた處に駄菓子と日用品を商ふ五兵衛の店先、一人娘のお市が何か思案顔。

その折――帆立の丑松の子分、熊の九郎藏、洞穴の作藏、黒目の又五郎の三人が通り過ぎる。彼等は大鍋方へ使者に立ち決裂しての歸途だつた。が、お市の美しい姿に見惚てからかひ半分に、

「姐さん、俺等はぢきに下田へ越してくるよ――大喧嘩をして下田を一手に押へちまふ帆立の丑松親分の四天王だ」

その言葉をきいて今まで店先に寢轉んで居た三十近い、苦み走つた顔だちの男が突然突つたち。

「何だと！」

それは大鍋の子分鯉名の銀平だつた。

銀平の出現に三人が去つて行く。その後へ忙しく大鍋の子分が駈けて來て、銀平に何か囁いた。

銀平は力强くうなづいた。

やがて、店先にはお市と銀平の二人きり銀平はお市に話しかけることを躊躇してゐたが思ひきつて

「お前卯之を想つてゐるのか」

「厭な銀平さん、そんなこと……」

銀平はお市が自分をどう思つてゐるかを知りたかつたのだ今度の大鍋一家と帆立一家の縺れ――どうせ喧嘩になり見事働いて運がなければ打死だ。勿論、銀平は命を賭けた渡世人、命の短いのを苦にはしては居なかつたが……お市の本當の心を聞いて置かねば聞くときなしで自分の一生涯が終ひになる！

野暮！　馬鹿！

そう云はれることも承知だ。然し幾ら問ひ詰めてもお市は何事も語らうとはしない。

五兵衛も歸つて來た。そうして大鍋親分への日頃の恩義に酬ひるため、今度の爭ひに、役には立たねえが出張ると云ふのだ。

爭ひの時刻は已に迫つてゐるのだ！

お市が父親の身仕度を手傳ふために、奥へ入つた後、美男爪木の卯之吉が、喧嘩支度を整へ訪れる――それはお市に決別の爲めに來たのだつた。銀平と卯之吉は氣まづい思ひで顔を合せた。同時に銀平はせめて、兄弟分の卯之吉からでもお市の心を知らうとする。

「永え月日にたつた一度、賣り買ひの出來ねえ女に、正眞無垢の戀をした。俺の日頃を辨へて可哀さうだと思つたら、お市が何と俺を見てゐるのか、そいつを聞かせてくれ」

卯之吉は銀平がお市を想つてゐることを知らないではなかつた。然し、已に、自分とお市はとうから出來てゐるのだ。それだけに卯之吉は銀平に對して何だか謝りたいやうな氣がするのだ。

「銀平、お市と俺は……勘辨してくれ」

それ以上銀平は聞く必要がなかつた。自分の間抜さ、愚さを嘲りたかつた。罵りたかつた。同時に、心の底からひし〳〵とこみ上げて來るものは卯之吉に對する憎しみだ。

「畜生憶えてろ」

さう呟いて銀平は我が家の方へ立去つて行く。

「生きて戻れたら三三九度の假祝言もしもの時あ、別れの盃だ」

お市は悲しい中にも許された嬉びに咽び泣く。

——その折、人寄の合圖に法螺が鳴り渡る。

——續いて二度、三度。

五兵衛に、卯之吉、時遲れてはならぬと韋駄天走り銀平もその合圖を聞いたのだ、店先を走り過ぎて行くがお市の姿をみとめると。

「泣け、泣け、卯之畜生め、野郎！野郎！」

銀平は喧嘩場のどさくさに紛れ、卯之吉の首を狙ふとしてゐるのだ！

二

爭ひの一刻が過ぎた。

大鍋方が勝つて本陣へ引揚げて行く。卯之吉を待ち構へてゐる銀平。

それを知らずに卯之吉も引揚げて行かふとする。

突然、その前へ現はれた銀平は無言のまゝ竹槍を構へる。

「今度は俺が賣る喧嘩、買ふか卯之吉」

やがて五兵衛は卯之吉とお市に水盃をさしてやる。

「成らねえ戀の逆怨みか」

彼等の無氣味な對立！

丁度、その時だつた。帆立方の岩角の多治郎が姿を見せて、

「氣の毒だが二人とも斬つちまふからさう思へ」

銀平の胸に怪しい閃き。それは卯之吉と多治郎を爭はせることだ。

「卯之吉が、一番手、俺は二番手、一騎打ちの勝負だ」

卯之吉は銀平の眞意を覺り、敢然！多治郎に挑戰する。然し、相手は帆立方指折の勇者、次第に卯之吉は危ふくなる、然し、それでも銀平は手を出さないのだ。それだけに心の懊惱煩悶は大きかつた。

が、遂に銀平は決心して卯之吉の危難を救ひ、岩角を斬り倒す。

「惚れた女への志手前の命大事にしやがれ」

そうして、銀平はけふもあしたも吹く風に身體を任せた股旅者……

三

四年後——

卯之吉はお市と夫婦になり堅氣になつて日

を送つてゐた。然し、この土地は、大鍋親分の病死後帆立の丑松が勢力を得た。そうして卯之吉が、大鍋身内の弔合戦を計畫をしてゐると難癖をつけ土地を引揚げと談じ込む卯之吉は悲しくもあきらめ、荷物を拵へ初める。

足掛け四年の旅人ぐらしで鍛へて歸つて來た鯉名の銀平。その店先が散亂されてゐるのに驚き、聲をかけようとするが抑制する。が再び、引き返して來て家の内部を窺きこむ。丁度通り合した、與之松を連れた角兵衛勘藏——

銀平は勘藏の悪事を知つてゐるので、與之松を救けてやる。

そうして、五兵衛、お市に再會するのだつた。曇つた空からは雪が降りはじめる。

四

闇黒の雪道・心を決した卯之吉は帆立の丑松を斬つて逃のびて行く。それを追縋つて來た澁屋の百助洞穴の作藏。

卯之吉は二人を相手に闘ふが、疲勞してゐので、辛く百助だけを斬る。

卯之吉危ふし——その時であるやうやく駈けつけた銀平、作藏を一氣に斬り伏せる。

又しても卯之吉は銀平に救けられたのだ。

五

五兵衛、お市、與之松が風雪をさけて卯之吉を待つてゐる。

逃れて來た卯之吉、然し、追手に圍まれて銀平が斬死にするかと思へば、その胸は苦しかつた。

「とつあん、お市、死なせてくれ」

そう云つて再び、卯之吉は元の道へ走り去る……

六

栁崎辨天附近。

已に鯉名の銀平が捕吏に縄を打たれてゐる。

「帆立の丑松初め其他の者を確かに手前が斬りました」

息せききつて駈けつけた卯之吉、下手人だと役人に自首するが、銀平の言葉にさへぎられる。

「渡世人の手柄を横取りする氣か、旦那、急いで參りたいのでございますが……」

五兵衛、お市、與之松の三人が駈けつけた時には、已に銀平が引かれて行つた後だつた……

雪の朝、遠くから下田節が餘韻を嫋々と。

『日蓮聖人御法海』勘作住家に就て

豐竹古靱太夫

此度日蓮聖人六百五十年記念興行として上演せられる日蓮聖人御法海の内勘作住家の段を私が勤めますので何か執筆せよとの事ですから作者其他に就て御話し申上げます。

日蓮聖人を題材に致しました淨瑠璃は至つて少ない樣に考へます、先づ始めて義太夫節に成りましたのは享保三年十月十二日より竹本座にて作者近松門左衞門「日蓮聖人記」と題し上演されたもので、此の時の太夫役割は不明。其後三十ケ年後の延享四年十月、江戸肥前座に於て「いろは日蓮記」と題し上演、又二年後の寛延二年十月八日、近松門左衞門作當世並木宗輔添削と有りまして、此時の外題は「日蓮記兒硯」と成つて有ります。尤も前のいろはも兒硯も近松作の日蓮聖人記の添削成る事は正本の外題角書で明かですが始めの院本がありませんから慥に同じ物とは云へませんが江戸肥前座上演の物は同じであります。

江戸の日蓮外題の時の役割も番附が有りませんので不明。其の次に同寛延四年十月十日初日で、大阪道頓堀豐竹座で外題を「增補日蓮聖人御法海」と改題して上演。此の年寶暦元年と改元、日蓮記兒硯の丸本と御法海の丸本とを見比べますと、文章は多少違つて居ますが結構段取は同一で、何れも三段目の勘作内の段は最も作者の技巧を凝らした場面であります。

此作者は並木鯨兒、並木正三、添削者淺田一鳥、並木宗輔で此時勘作内の切を語られましたのは初代此太夫、後に豐竹筑前少掾藤原爲政を受領された師であります。

其後永らく此外題が上演されず享和二年に至つて、十月十五日より大阪北堀江市の側芝居にて初代豐竹麓太夫師が勤め

られ、其後二世土佐、播摩大掾師、初代巴太夫師、二世巴太夫師、四世綱太夫師、藍玉組太夫師、初代豊竹三光齊師、三世氏太夫師、初代大隅太夫師、三世長門太夫師、初代長尾太夫師、初代古靱太夫師、四世住太夫師に依つて上演されましたが明治廿一年十一月、同廿六年十一月、同三十年十一月、同四拾一年十一月と四回御靈文樂座で上演、右の内三回は越路後に攝津大掾師が勤められ、一回は私の師匠先代津太夫が語られました。此間に彦六座、明樂座、堀江座各人形芝居で六世時太夫師や、五世住太夫師並びに今の土佐太夫師が伊達太夫時代に勤められて居られますが文樂と致しましては、二十四年振りで上演される事になりました。申述べました通り各名太夫、師匠方の語られましたものを未熟の私が此度初役として勤める事に相成りました。

御存じの方も御座いませふが、右作中の鵜飼ひ勘作と云ふ者はないものだそうで、私が甲州へ巡業致しました時、甲府市から一里廿町、石和驛より十町餘りの所で、鵜飼村鵜飼濟度之舊跡鵜飼山遠妙寺々内に勘作の墓、實は平大納言時忠公之墓所とありました。此方が此所へ流罪になられて後に鵜を遣ひ、殺生禁斷の場所へ網を入れ簀卷の刑に行はれ、其亡靈を聖人が成佛解脱せられし事を仕組んだものだと彼地の人は話して居られました。

此勘作内の段は淋しい物でありますが、後半は節附けも又反對に賑やかに出來てありまして、どうかすると踊る樣に成りますから氣をつけて語らねばなりません。すべて義太夫は一段の内、前半段が特に六ケ敷き物となつて居りますが、此勘作内も其例に洩れず勘作の出、又詞等由來難物とされて居りまして淨瑠璃の内でも余り男の幽靈が物を云ふ事は數なき物とされて居ります。

甚だ纏つては居りませぬが之にて日蓮聖人御法海勘作内に就ての私の所感を申述べ此稿を終り度いと存じます。

（昭和六年參月廿八日記）

勘作住家の段人形割

庄屋德藏	吉田玉次郎
勘作の母	吉田玉七
經市	吉田文二郎
本間六郎左衞門	桐竹門造
女房おでん	吉田文五郎
勘作の靈	吉田市松
日朗法師	桐竹紋十郎
日蓮聖人	吉田榮三

・文樂座四月興行上演・

食滿南北　新作　鶴澤友次郎　竹本津太夫　作曲

『日蓮聖人御法海』

佐渡ケ島――【塚原三昧堂の段】

（床本）　塚原三昧堂の段（口）

さる程に日蓮上人は龍の口の御法難ふしぎにお命つゝがなく再び下る厳命は佐渡へ流罪の御うき目、然るにこの國の念佛の行者昔北面の武士遠藤左衛門尉爲盛阿彌陀如來を信仰のあまりに今は阿佛房ひそかにしのぶ塚原の三昧堂に程近くひとりうなづき聲ひそめ阿彌陀如來にお誓ひ申し上げる念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊と諸宗を罵しる日蓮坊人手をかるまでもなし法敵打とり災の根を斷ちまふすべく南無阿彌陀佛と唱ふる爲盛千日尼は走りよりマア〳〵まつて爲盛殿フムさ云ふは妻の千日尼か阿彌陀如來に誓ひを立て日蓮坊を打取るにナゼ止めるそこのきおらうとはげしき言葉妻は悲しさ押かくし、もし阿佛坊吾等めをとは佛の道とくにも悟り法號を受けて有髮の比丘比丘尼それに白刄を血に染めて阿鼻の地獄に墜つる氣か上人樣はこの世から活き佛にておわします殺生戒はやめてたべ拜むわいのと手を合せば爲盛はとつてつきのけくどくどとやかましい活き佛の日蓮なら鎌倉殿のお叱り受けこの佐渡へ流し者にはならぬ筈まして諸宗を罵しる上念佛無間とぬかせし坊主法敵をうちとるは、これも方便佛弟子のつとめなるわすさりおらうとねめつくる妻はあるにもあられぬ思ひコレ阿佛坊殿お前もげんざい問答して上人樣に云ひまけたを遺恨に思ふての刄物三昧であらうがなエ、默れ女房男のする事女のさし出るところでないわ、のけ〳〵〳〵と爭う夫婦雪はしとゞとふりしきる地獄の責か八寒のこの世からなる修羅道の業苦の程ぞ怖ろしけれ如何はしけん千日尼ド

ひとまろべば南無三寶さすが夫婦の恩愛に抱き起して如何いたした怪我ばしせぬかといたわればもうし妻をいたわるお心根その佛性を其儘にナゼ上人をたるゝぞ助けたまへと諫むれば弱る心の爲盛はたよりも悪しと打うなづきフム一旦は妻の言葉立つるも佛へ報恩のこれも一つの道ぞかしうれしう御座んすそれならこの儘歸宅いたして刃をおさめん忝じけなしとふしおがみ底の心は白雪の道踏みわけて兩人は我家へこそは歸りゆく。

（床本）　塚原三昧堂の段

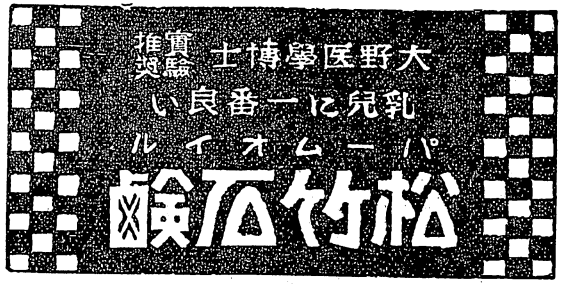
諭がかり〳〵濁刧悪世の中にば多く諸〳〵の恐怖あらん悪鬼其身に入つて我を罵詈毀辱せんと妙法華經勸持品にこそ説かれたれされば此處に遠流の身北國の寒山佐渡が島心身共に塚原や如説修行の三昧堂雪は一丈軒は六尺風荒波に横とほる銀河にあらぬ白妙や不輕菩薩を今目前法華の行者日蓮上人扉を開きふりしきる吹雪の空を見やりたまひアまことやな竺の道生は蘇山に流され法道三藏は面に火印されて江南に流罪の身となる是皆法華經の德佛法の故なり吾は日本國東夷東條安房の國海邊の旃陀羅の子徒らに朽ち果てん身を法華經の故に捨てまいらせん事これ石を黄金に代ふるに非ずやアラ尊やと御自作の釋迦牟尼佛の御像に御手を合せ唱題の御聲もいとゞすみ渡る折から雪をかさこさ人こそ來れ島の子がほだをあつむる高調子波よ來い〳〵此處までござれヨオイヤサ、舟に帆あげて帆あげて舟に鷲の御山の麓までヨオイヤサ、唄ひつれ〳〵雪の軒來かかる童子を見やりたまひヤヨ童、明暮人の來らぬ庵殊に見馴れぬおこと等は處の者か但し又よその里よりつるかたづねに童子は聲清く上人樣がこのいほりに一人淋しくおゐでと聞きお慰みと存じまして二人で此處まで參りましたとやさしき言の葉嬉しくオ、よくぞたづねまゐりしな去歳今月十日相州依智の郷を立ち久米河の宿あとに見て越後の國寺泊それを本土の見納めにこの大海を渉り來て雪より雪海より海のその外は慰むよしも荒磯の島守る翁となりはつるわれを音のう嬉しさよと〳〵島の物語りめづらしき事聞かまほしとのぞみたまへばわらべ達扇とり出し身をかまへそらふ手振の面白や天津島根にゆるぎなき國の柱や大舟の人を渡しの惠の深みヨイヤヨイソロエッシッシエッシッシ、わだづみの底龍神の聞きも洩らさぬ八の巻蓮華もひらく八葉の水のにごりにましぬ華露を玉とぞきよげなる、ヨッシッシエッシッシ、それかあらぬかこの島の黄金の花のふり候、ふるや散華のとことわに淨土とこそは申すなれ、ヨイヤヨイソロ、エッシッシ、エッシッシ、唄ふも舞ふも上人をたたふる童いぶかしとこなたは威儀を正し給ひ優しの童よくも來りてなぐさめくれしぞさりながら不思議なるおこと等そもや何處より參られしぞ語りたまへとたづぬれば、二人はいつか白絹の羽袖に似たる御姿スツクと立つたる氣高さよ過ぎつる頃龍の口の御道すがら鎌倉八幡社頭にて御僧の口づからヤヨ八幡何とて法華の行者をば守らせ給はぬ不思議さよ諫め給ひし御言の葉、今で使ひを送るべし頭の白き烏こそ軒端に近く飛びこうならば御赦免の日と知らるべし夢疑ひ給ふなよ、さらば〳〵とばかりにてあゝ白雪とちりしく靈鳩ずがたは消えて失せにけり上人茫爾と笑傾けオッ扨は八幡大菩薩の吾を守らせ給ふしるしか、今ぞ思ひ當つたり御經に曰く天の諸〳〵の童子以て給使を爲さん、刀杖も加へ

ず毒も害することを能はじとか頓て赦免の日を待ちて一天四海皆蹈妙法我等の望みも近きに成就アラ嬉しや忝じけなやと如來の尊像ふしおがみ扉をとざし入り給ふ誠に本化上行の再誕とこそ拜まるゝ折しも庵の軒近く忍びよつたる阿佛坊爲盛念佛の怨敵法の仇、身はぬれ鷺の小鮎を狙ふ刀の目釘しめやかにおのれ日蓮眞二ツとかたへにこそは身をひそむ影白雪を踏みしめて何と千里の山河を越えて波濤のおきふしや、やつれ果てたる筑後坊恩師を思ふ誠心にやう〳〵たづね日朗が埴生の小屋にたどりつきこれかと見るや目もうるみ聲細々と呼び立つる師の坊はおわするか筑後まゐつて候ぞや弱る心を取直し、這ひよる竹椽師弟の緣し耳にこたえて上人は扉のすきより見給へばまごう方なき日朗法師思はずまろび出たまひ、サ云ふは筑後坊日朗ならすやオッ師の御坊にてましませしか筑後であつたか、お師匠樣と、たえて久しき對面に先立つものは涙にて軒の氷柱や雪解の水ぬるゝ袂の右左、御懷かしや無事なるかと互に手と手顏見上見下す嬉し泣き、しばし言葉もないじやくり上人御座をあらため給ひ久方の對面に取亂せしは不覺の至り筑後坊御身は吾と諸共に囚へられて土牢に法難うけし身なりしに如何致してこの孤島へ誰に許されて來られしぞ、たづね

に日朗聲うるませ師の御坊の御消息に牢をば出させ給ひ候はゞ疾くとく來り給へ見奉り見えたてまつらんとの有難き御仰せ宿谷殿の情にすがりしばしの程を許されてそも鎌倉に立出でて人目しのぶのすゝきにあらぬ野末の床の假枕幾夜寢ざめの寺泊やう〳〵波濤のり切つてこれまでは來つれどもこの大雪に道さへ知れずたづぬる人も荒波の磯にさまよふ島千鳥、泣くねしのびてはる〳〵と、これまで參りまして御座りますと云ふも寒氣にとぢられて齒の根も合はぬふるひ聲、哀れと見やれど身命を惜まぬ上人御聲高く未練に候筑後坊うき事のなほこの上につもれかし限りある身の力ためさん日蓮の弟子旦那は護法弘通の其爲に身命は惜まぬ筈御身鎌倉をあとにしてここへ來らば何者が、かしこにあつて法華經の折伏の修行誰がするまみえやうと申せしは靈山淨土を指したるなれ佐渡は小さき孤島なり、この島の教えは日蓮一人にて事足れり、ハヤ〳〵鎌倉へ歸られよ寢てもさめても法華經の弘通に一心こもりたる恩師の言葉合掌の肝に銘じ今更に愚かの日朗が胸にめいじたりさりながらこの島守の朝夕を誰が供養せん勿體なしせめてお傍にあり海山より高き法恩の萬分一をつくさんとすがりなげけばとつてつきのけ

過去の不輕菩薩は法華經の御爲に杖木瓦石を蒙り師子尊者は頭を刎ねらる天竺大師は南三北に七あだまるゝ皆是御法の爲ならずや日蓮は諸天善神守護の身ぞ筑後坊には都弘通の大任あり、ハヤ〳〵歸りて不惜身命逆化の修行を怠るまいぞ、ササ其お言葉背くにはあらねども弘通の爲には猶更に大切なは師の御坊如何に御法の爲とはゆへこの北國の雪の空、戸ざしも嵐吹き通ふ八寒地獄まのあたりせめては榾の御給仕と叉立寄るをハツタとねめつけ日蓮とて日朗とて私の命にあらず皆法華經の行者ならずや凡情のなさけは墮獄の因緣とく〳〵此處を立去りおれとはげしき言葉是非なくもハツと計りに立ちあがれど、はるばる來つる孤島の軒、逢ふが別れの束の間を悲しやのうと見返ればさすが師弟の恩愛に凡夫にかへる憂き涙檀特山の涙別も、かくやと計り雪解して落ちて流るゝ谷川の水嵩まさる如くなり、日朗やう〳〵氣をとりなほしもつたる包とく、〳〵も師の御坊に奉らんと御たしなみの橘を持參いたして御座ります、日朗の身にかへてお傍へお置き申しまするとゝさし出せば打いたゞいて如來にさゝげ筑後坊の供養日蓮嬉しく思ふぞよと佐渡は吾等の本懷をあらはす爲には大事の場所折伏逆化の道しるべ御本尊をば顯はし申さん何たかはやがて歸國の上エッイヤ歸國の上は弟子檀那に日蓮無事と傳へられよ紙さへあらぬ佐渡が島よしなに披露あるべしと唱題の聲朗かに更に餘念はなかりけり、それではどうでもエイ未練であらふぞハツタととさす庵の扉雲山萬里師弟の別れ雪はしせきもわきまへず降り積む中を筑後坊ま一度お顏とふりかへりよれば吹雪にへだてられ見へわかぬ師の御かげをのび上り見る雪の道すべる足もみ踏みしむる氣强く追ふも法の爲さすが別れの惜しまれてソツとのぞけば立戻るえにしも深き白雪をあとに見すてゝ日朗はまた鎌倉へ引かへす心のうちぞ哀れなりあと見送つて上人は思はず椽へまろび出で許してくれよコリヤ日朗波濤へだてしこの島へはるゝ〳〵たづね來たりしをつれなく返すも法華經の如說修行の爲ぞかし恨みとばし思ふなよ恩愛慈悲の御なげ尊くも亦けなげなり。爲盛はこらへかね、太刀なげ出し雪に手をつき驚き入つたる上人の御志御法の爲に御弟子を追ひかへさるゝかゝる尊きひじりともしらず白刃を當てんとせし大逆無道のこの爲盛イデ存分にめされよかし、大地にドウと座をしむれば上人ニッコと笑傾け愚かや爲盛すでに龍の口にて此首うたれんとせしさへ諸天の加護を受けたる身ぞ御身の妻の千日尼ひそかに吾に仕ふる此頃おことも心ひるがへし法華經の爲につくされよと聞くに小かげを千日尼走りよつて有難涙上人樣だん〳〵とのお情有難う存じまする兩手を合はしふしおがめば妻の供養は阿佛坊の供養今より日得とあらため折伏の修行めされよかし、ハッハッと頭を白雪にうづめうやもう其折から飛びかう軒のむら烏上人きつと見たまひてオッ歸るべき時は來にけり烏崎八幡大菩薩の御託宣今ぞ思ひ當つたり開くや法のはちすばに東天紅とくだかけの惠はふかき日の光思はず合はす三人の手南無妙法蓮華經の今又も都にかへり咲き末世を救ふ上行のその再誕の佐渡が島、有難かりける次第なり。

ビニゴゴサル
料飲冷清
シロトンボリ
大日本麦酒株式会社


推賞
奬勵
大野医學博士
乳兒に一番良い
ルイオムーパ
松竹丸

清楚な淡化粧に

新御園水白粉

純白・肌色・櫻色

各五十錢

本舗　伊東胡蝶園

新聞
廣告は電通へ
大阪市北區中之島二丁目
新聞廣告代理業
大阪電報通信社
電話
本局
五五九九
五六一九
九一九四
九二六八
三六〇四
〇〇六〇
二〇〇五
三九二〇
二〇〇三
營業部
製版所
本社 東京 日本電報通信社
主ナル支局
名古屋 金沢 下關 釜山 北京 南京 平壤 天津 奉天 長春 京城 新京 青島 大連 哈爾濱 牛莊 營口 上海 東京 北海道 大分 長崎 熊本 鹿兒島 廣島 岡山 仙臺 青森 盛岡 秋田 山形 福島 水戸 千葉 横浜 横須賀 甲府 長野 松山 高知 札幌 函館 釧路 旭川 室蘭 帯広 網走 根室 倫敦 巴里 紐育 桑港 羅府

新時代の齒磨

クラブ齒磨

最も新しく
最も有效な
クラブ齒磨

優良第一の國産
セルロイド製柄

クラブ齒刷子

淋病

ルーチノゴ

斷然たる決心を以て、即時お求めあれ

男女、淋毒性、膀胱炎、尿道炎等に對し遺憾なく治療の目的を達し且何等副作用なき最も卓越せる新藥なり

一圓五十錢
二圓三十錢

各藥店にあり

西村久合名會社

大阪東區伏見町二
電本局一四六〇番
振替口座大阪六九〇〇

「ギブス」固煉齒磨

本品を使用すれば、幼時より老年に至るまで齒牙を完全に保つ事が出來ます。

何故なれば、**ギブス**煉齒磨は刷子がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのでありますから毎日二回必ず**ギブス**煉齒磨を御用ひ遊ばせ、さすれば氣分は爽快になられます

本品は美しきアルミニューム罐入りで桃色の固煉製であります、有名な百貨店藥店及化粧品店に賣つて居ります。

大形　壹個　金七拾錢
小形　壹個　金四拾五錢

大形中味　壹個　金六拾錢

ロンドン　パリス
デイ・エンド・ダブリユー　**ギブス株式會社**

日本代理店　株式會社　**横山商店**

東區豐後町三番地

‖純情の人妻、若きピアニストの悲しき最後を描ける社會悲劇‖

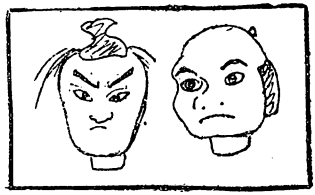
上島量原作脚色

〝紅の薔薇〟

監督　曾根純三
撮影　三木稔
主演　水原玲子
助演　牧英勝　高島登　淺野節　小川鷹　生方一平　向山峯三　久米順子　桂珠子

‖『女給』と同メンバーに新進花形女優を加へた大力篇‖

帝國キネマ演藝株式會社



猿廻しは世話物の錚々たるもの

竹本土佐太夫

私は文樂座四月興行で、中狂言の「近頃河原達引」堀川猿廻しの段を語る事になりましたので、些さか所感を陳べさせてもらひます。

此の狂言の作者は中村重助で、第一祇園の段、第二揚屋の段、第三河原の段、第四堀川の段、第五道行涙の繻笠、第六聖護院の段、此の六場面から成立つてをります、近來は歌舞伎でも、あやつりでも、河原と堀川としか演じませんからお俊傳兵衛の生死も不明になつてゐますが、大詰迄演じますと、傳兵衛の手にかけた横淵友左衛門は、悪事露見して罪せらるべきであつた事がわかり、傳兵衛は助命せらるゝ事に成つてゐます。事實は情死したのですが、さうしては可愛さうでもあり、大詰が陰氣になるから、見物人の喜ぶやうに仕組んだのでせう。

私が大阪の芝居で、初めて此の猿廻しを演つたのは明治三十九年一月堀江座で、切狂言に之を出し、追出しに道行を加へました。次は明治四十四年五月同座で語り、此時大隅太夫が文樂座から轉座して中幕に佐倉惣五郎を語りました。三度目は大正四年二月文樂座で勤め、此時三代目越路太夫が紋下にをはり、人形使ひの三代目玉藏が這入つて來ました、四度目は大正十一年六月文樂座で中幕に語り、大切に今度と同樣橋辨慶でした。五回目は大正十五年九月文樂座の盆替りで吉三郎が七代目吉兵衛になりました。そして今回は六回目に當ります。

名文ではありませんが、趣向が面白いのと、與次郎の正直一圖や、母親の粋な言葉や、お俊の純眞な情操が快よい感じを與へましてお客をほへりとさせます。そして初めには鳥邊山の稽古があり、仕舞には猿廻しがあるので、前後對照して場面が陽氣にもなり特種の美感を起します。節付の上から見

ましても流石に代々の名人が工夫をこらしたものほどあつて少しも抜目がありません。鳥邊山の唄は地歌から來たのですが、義太夫の三味線の手が巧に取手れてありまして、語つてゐるうちにも自然と興味が湧いて來ます。

人物の性格が前にもいふ如く夫れ〳〵によく出來てをりますが、中にも母親は物の知つた通り者で、酸いも甘いも嚙み分けて、少しも筋の通らぬことはいひません。「心中などしてくれたら、此母は目かいは見えず、兄はアレあの樣な憶病者」だの「人の落ち目を見捨てはと詰らぬ義理を立ぬいて、年寄りの此母につらい目見せてたもんなや」などの文句はよく出來てゐますから、語つてゐるうちにも情が迫つて自づと聲が曇つて來ます。

お俊のサワリは皆さん御承知の如く、前後二箇所ありますが、後よりは前のサワリがよく出來てゐます。お俊の眞情が籠つてゐます。そして情死の覺悟はしてゐながら、夫は隱して暗に其の心持を訴へる所に妙味があります。お客の方ではあとのサワリに重きを置いて「待つてゐました」といふ聲がかゝりますが、私などは初めのサワリの方が意味深重であると思ひます。此のサワリの文句によつて此狂言の全部が生きて來るやうにも思ひます。あとのサワリはいはゞ自暴自棄、卽ちお俊がヤケクソになつてゐるやうです。從つて言葉が露骨です。

仕舞に猿廻しを唄ふのは此の場面としては少し無理です。文句にも「祝ひ唄ふも聲低に」とある位ですからさう花やかに大聲を出してわめき立てゝは、全部の情景を叩きこわして仕舞ひます。それでもお客は、アノ花やかな三味線を期待してお聽きになる樣になつてゐますから、此の節附をかへるのは容易な事ではありません。それで私は一工夫して、極古い所の節を取り入れて見やうと思つて、よほど研究したのですが効果はどふか判りません。

缺點をさぐれば、何の狂言でも完全なものはありません。此の狂言も缺點は隨分ありますが、それでも何しろ昔から能くはやつた狂言で、どこへ興行にまゐりましても、此の狂言の出ない所はありません。私などは一つ土地で所望せられて二度も演じた事があります。世話物では野崎、壺坂、紙治の炬燵などが受けのよい狂言ですが、猿廻しは其第一位に置かれてゐると思ひます。かやうに此の狂言はザラにおまして、お客の耳にもしみついてゐますから、よほど上手に語らぬとすぐに半疊を打たれます。洗錬した上にも洗錬した、水の垂れる樣なことをいひたいと想ひますが、それが又容易に出來ないので困ります。藝は垢ぬけがして、枯れて來ねば、入神の技とはいはれませんが餘り枯れ切ると淋しいといふ弊が起ります。通人のお客には受けますが、お若い方には受けません。そこで其の中庸をとらねばなりませんがこれが又一ト苦

勞です。

同じ都も世に伴れて田舍がましの薄烟り」といふ文句には種々疑問がありますが、これは文學上の事ですから、私は茲には申しませんが。又「戸口を明くれば走り行く」の文句にも疑問がありますが、これは「走り行く」といふよりは「走り入る」といはぬと情が乘らぬ樣に思ひますので、原文を捨て「走り入る」の說を取つてゐます聞くとか讀むとかでばさうはありませんが演じてゐると「走り入る」でないと情が籠りませんから近きを上けて住太夫、大隅太夫、大掾各師皆走り入ることが本立の通りでないと注意した識者があつて大掾師匠は「走り行く」と語るやうに成りました。お俊は少しも早く傳兵衞の顏を見たいと戸の外であせつてゐた樣に想はれます、兄が出て來るのを見て、逃げ出すものとは想はれません。併し作者はどういふ心でかいたのか疑問は全く解けませんが、何れにしても此處の文章は少し曖昧です。

人物中では傳兵衞が一番語りにくいのです。町人であつて士魂があるのですから硬くなり過ぎては武士になるし夫かといつて忠兵衞や治兵衞の樣にグニャついてもいけず、つかまへ所がむつかしいのです、歌舞伎で此の役を上手に仕活かしたのは尾上菊之助氏でした。此の人は延壽太夫氏の舍弟で五代目菊五郎の養子になつてゐました、何でも若い時素行が惡くて五代目に勘當されたとか歸參が叶つてからスツカリ精神を入れかへてコロリと藝が變りました　五代目が明治座で與次郎を勤めた時本物の生猿を使ひましたが馴れてゐないからいふ事を聞かず、見物人をひつかいたりして失敬した事もありました夫れはコリ過ぎてゞした。此時の傳兵衞が卽ち前にいふ菊之助氏でこれが非常によかつたのです、前後にないよい傳兵衞で夫れから菊之助の名は益々出ました、お鶴を今の小松島屋が子役時代で土之助といひ五代目の與次郎に口上をいつてもらつた事を私は五代目と親戚同樣の交りでしたからいつも見に參りましてようおぼえて居りました。

亡師攝津大掾も堀川は大得意の出し物でした。先代大隅太夫も屢々語りました。そして兩師とも夫れ〳〵に長所がありました。私も身分相應の特色を見せたいのですが、うまく行くかどうか分りません。三年五月には古靱太夫氏が語つて好評でありましたが此の人は却て原文によつて語られたやうでした。まだ〳〵話しはありますが、餘り深く立入つて難かしい事を申しますと却つて解りにくうなりますから、此邊でやめて置きませう。

（四月一日記）

堀川猿廻しの段人形割

與次郎の母	吉田小兵吉
弟子おつる	吉田文之助
兄與次郎	吉田榮三
娘おしゆん	吉田文五郎
井筒屋傳兵衞	吉田扇太郎

第一劇場は何をかたしか？

祖　淵　野

○

更新第一劇場の公演は興行的にはあまり香しい成績ではなかつたが、その新劇團としての仕事の上では關西劇壇に實に大いな波紋を描いた。

猿之助の春秋座の寶塚公演を向ふに廻して、第一劇場は完全に波をノックアウトしてしまつたといつても誇言ではなからう。

私は多くの新聞の批評を見た。多くの識者の批評を聞いた。大衆の聲を聞いた。そして今度の公演が春秋座に比して、遙に高く評價されてゐる事實を認めないわけには居られなかつた。

關西人はいつたい、東京の劇壇をいつも高く買ひかぶりすぎてゐる。だが今度こそは大阪自身の產んだ新劇團を正當に評價したのだ。これは關西劇界近來の快事であつて、この後の關西劇壇の滿潮を前兆するものでなくて何であらう？

殊に、大阪歌舞伎俳優の若手の不振がたへず人の口にのぼつてゐた今日、歌舞伎の若手の中幹のこのめさましい活躍は驚異に價しなかつたであらうか？

私は第三者として考へてみる地位にはゐないが、壽三郎君はもとより、扇雀、霞仙、橘三郎、成太郎、雁正、駒之助、升藏八百藏、奧山等の諸君の新劇に於ける演技が、春秋座はもとより同時に朝日會館で公演された新東京の俳優諸君の演技の水準に、どう割引して考へても、劣るものとは思はれないのである。

稽古に對するこの人々の熱心さ、演出に對する理解とすなほさ——演出家としての私は、誇張なしに唯の一度もその方面の不愉快さに直面しなかつたことを感謝してゐる。これは私だけではなく、脚色者も裝置家も皆な一樣に感心たことしである。

大阪歌舞伎若手俳優の不振の批難など消えてなくなれだ。この人達には實に大きな前途が待つてゐるのだ。それが今度の第一劇場の公演で實證されたのだ。

○

二月三十日から九日間の稽古。こんなえらい稽古はしたことがないといつた俳優があつた。しかもそれは不平ではなかつた。歡びだつた。歡んで猛烈な稽古をやつた。「歎きの天使」などは二日間衣裳をつけて舞臺をかざつて、本息、本調子で稽古をした。皆へト〳〵に疲勞した。それでも顔だけは目だけが新しい仕事に對する歡びと熱とで輝いてゐた。大阪の歌舞伎の人々のその意氣その熱——第一劇場はいくらこの興行で損をしてもこの意氣と熱とを買ふにはまだ〴〵安すぎる代價だといつても叱る人はあるまい。

○

壽三郎君のウンラート博士、扇雀君の學生Y、霞仙君の酒場の亭主、橘三郎君の手品師、成太郎君の學生等の扮裝は、今までの常套をすつかり打破して全く別個の人間になりきつた扮裝だつた。舞臺稽古の夜、五時間もの間、大きな縫ひぐるみを着せられた橘三郎君が、お小便をこらへて舞臺裏をうろ〳〵してゐたのだ。實際各優が舞臺に現はれても觀客は始め當分誰だか分らないなど、扮裝がうまなかつた。これも一つのエポックメーキングだ。

○

裝置のよかつたのはこゝでいふまでもあるまい。大森正男松田種次、大塚克三の三君の各特色が實によく出てゐた。

効果の小川君が苦心に苦心して出した「楠木正成」の馬蹄の音、「姉」のとかの音、「歎きの天使」の帆の音、鷗の鳴聲等驚くべき効果をあげた。はやし方の小川君の苦心は皆が買つて感激した。

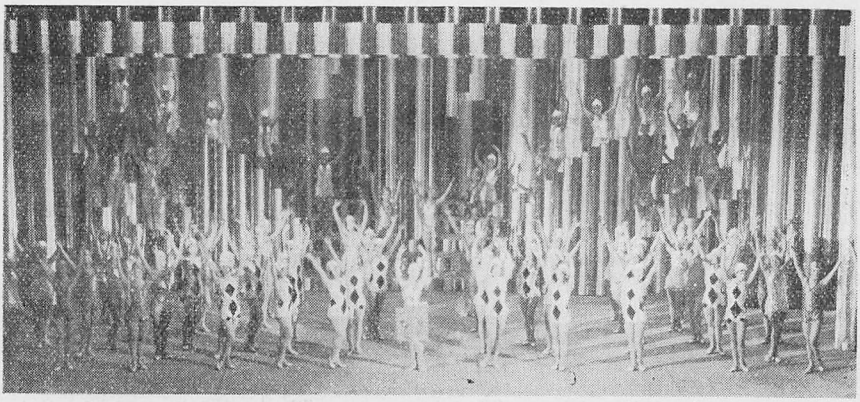
照明の橋本君もその自由自在なスポットの驅使で驚くべき効果をあげ、舞臺係の小政君が幕の上下した、テンポを數をよんで出してくれたなど細心の注意をはらつてゐた。

○

すべてが私が「新興演劇」誌上で、「明日の劇場への階梯」として擧げたものゝとなりに運ばれた。これは實に愉快だつた。

第一劇場は關西の持つ唯一の職業新劇團である。いや日本でもその存在は春秋座と對立すべき新劇團である。

この劇團をこえ、完全に明日の劇場まで守りぬきたいものである。



春のおどり・第八景・金剛石

春の踊について
或る批評家に答へる

大森正男

春の踊の批評を種々うかゞつた中で、ある批評家のお言葉にお答へしたいと思つて居た事を記して「道頓堀」編輯者の御註文をはたしたいと思います。

春の踊の六年間に思へばいろんな變化がありました。構成にたづさはる人達の變化、踊子の變化。それよりも世相の變化です。

第一回の頃即ち昭和元年と今年では、世相の變化の甚だしさが踊の構成にたづさはる者達に相當の影響がある事はいなめません。

不景氣といふ言葉で灰色にぬりこめられた世相の中で、春だ！踊だ！と桃色に上つ調子になつてゐるのは、いさゝか氣

松竹座の春の踊が今年でもう六回目だと思ふと、自分の頭に白髪の殖えたのも無理はないと思ひます。色街だけにあつた春の踊に松竹座が突然ワリコンで他所の踊になかつた特色を出して、大阪の名物を一つ增したのだと思へば、第一回から苦勞をして來た者にとつては、誠に愉快な事です。

のひける感じがないでもありません。

併し一體私達は少し生活を苦しみ過ぎはしないでせうか、生活といふ言葉の下に「苦」の字をつけすぎはしないでせうか「苦」の字のかわりに「樂」の字をつけてはいけないのでせうか、苦の中にゐる人達がわづかな閑をぬすんでしばらく苦の中から出て見るといふ事が、いゝとか悪いとかいふよりも、必要な事ではないのでせうか。

春の踊はスポットライトに桃色のカラシートをはめて、皆さんの中へ強い光を投げかけてゐるのです。皆さんがその中で何分間かを過されるのが、意義があるとかないとか論議されるのでなしに、まあ松竹座の椅子に腰を下して頂きたい。春の野は皆さんの眼と耳を樂しませる筈です。春だ！踊だ！以外に何もないのです。若しそれで腹のたつ人はあの無理に咲かせた造花のサクラのアーチをくゞらないで頂きたいのです。

私も亦不景氣といふ灰色の世相の中に生活の下に苦の字をつけて、あへいでゐる一人なのです。たゞ皆さんと違ふところは松竹座の春の踊を「裏」から見てゐるだけです。

春の踊を裏返すと又不思議なものが出來上ります。そして春の踊を見物に來られる皆さんが羨しくなります。春の踊を表から見られない私達は何を見に行けばいゝのでせう。

人を救つて許りゐる神樣も並たいていの御苦勞ではないと思ひます。たまには御自分も救つてもらひたいと思はれるだらうと凡人並に御同情申上げます。私達と神樣を一緒にしては申譯がないのですが。

そうは申しますものゝ春の踊を裏返して見てゐる者にとつて生活の下の苦の字が樂の字にダブツて變つて行くのは踊子と踊子の脚の間から皆さんの顔に（樂しさ）の色の見えるときです。その時私達は昇天します。黒衣の上に造花のさくらのふゞきをあびて。

他愛のないものです。春の踊とは。

決してむつかしく考へないで置いて下さいませ。所謂「げいじゆつ」ではないのですから。春だ！踊だ！と上つ調子なのですから。

『春は陽氣の加減で』

杵屋正一郎

春だ、踊だ、踊だ、春だ、です。

こんな陽氣に、さて作曲に就てなんかとおさまりかへつても居られません。

もう皆樣も二度や三度は御らん下すつたでしよう、「松竹座の春のおどり」を觀て頂く度にどこか一ケ所位づゝ變つて居る事に御氣付きでしよう。

そこが、すなはち、陽氣のかげんですあすこを、こんなに變へて見たらもつとよくなるだらうとか。

あの舞臺は、さびしいから櫻をもつと多くしたらいゝとか。

あの踊はお客にとても、うけてゐるから、もつと面白くならないかつてな事で幕内の者がみんな毎日お客のつもりで踊を見て居るからたまりません。

恩地かつ子さん何かは、氣の毒にも坊主の役を一つよけいに、ひつぱり出されて五分間すき間なしの踊りづめ、それで居てとても元氣に面白がつてゐる、なんザアこれもやつぱり陽氣の加減でしよう

千葉氏、食滿氏、山田の伸ちやん、江川の幸ちやんと私の五人で堀江の踊を見に行つて林長二郎君に逢ふ。

長さん曰くしかも大眞面目で

「わて一つぺん春のおどりの中へ一幕だけ出しとくなはれんか、どんな事でもしますよつてに」と千葉さんから

「そんな事をしたら下加茂で困るでしよう」長さん又曰く

「撮影の方は何とか社長にお願ひして休ませてもらひますさかい、是非出しとくなはれエな」

と、あながち成駒家式八方のみでは無いらしい眞劍さ、陽氣のかげんは大變な事になります。飛鳥明子が日本舞踊がやりたくなつて來たと云ひ出すやら。

江川幸一氏が日本舞踊の振付をよろこんで引受けるやら、望月太明藏が眞珠の場でとても珍妙不化思議な鳴物を考へるやら、

これとても陽氣のかげんです。

作曲、振付、大道具、小道具と毎日の如ふに變る忙しさの中に、いとも悠然と歌手のボナヴキダをライオンへ誘つて

「ハロー、チエロー、ブルースカイ、ベリーグード」

「今日はいゝお天氣ですな、春ですな、いや實にほんがらかで、よろしい、ぜに無いつまりません」

なんかと日本語を敎へて一人ほんがらかつて、ほくそ笑んで居るのは松本の四良ちやんです。

——六年彌生の末——

ゆめ・ゆめ

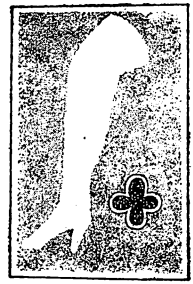
香椎園子

「なにを所望でございます」
「踊だ！」
「何のおどりでございます」
「何の踊でもよい、踊りたいものを踊つてくれッ」
「それでは困ります」
「何故だ？」
「いまわたくしには踊りたいものはございません」
「では踊れないと言ふのか、踊りたくないと申すのか」「いえ、踊るのはわたくしの稼業でございます。踊り子でございますもの、何々を踊れと所望下さいますれば、踊るのでございます」「我儘な奴だ、勝手な女だ、けれど面白い、ではあれを踊つて見い、あの……それそれ……え、カツボレと言ふのを……」
「かつぽれ……？はい、畏りました」
「いや、待て！」
「まだ何か所望でございますか」
「そちはそのように恰で癇に障つてでもゐるやうに、ツンとすまして、怒つたような顔をして踊りかけてゐるが、踊りと言ふものは、そんな心持でやれるものかな、もつと嬉しさうな顔をしたらどうぢやな」「いえ、わたくしは決して癇に障つては居りませぬ、怒つてなど居りませぬ」
「でもそちのその顎を前へツンと出してゐる形はどうも癇に障つてゐるやうに見える」
「この顎はわたくしの生れつきでございます、わたくしの踊ではこの顎が特長だと申して下さる方もございます」「さうかな、でもどうしてもわしにはそちが愉快でなさそうに見えてならん」「そんなことはございません、けれど踊らない時のわたくしはいつもこの様な素氣ない顔をして居りますかも知れませんそれは熱を胸の裡にかくして居るからでございます。まあわたくしの踊り出した時の顔を瞳を、體中をごらん下さい、それは譬ようもない愉悦と輝きに滿ちて踊りぬいてゐることでございませう」「うむ、さうかな」「たゞ慾を申せばわたくしは誰一人見ることの出來ない、雲の上か海の眞たゞ中で思ふ樣わたくしの好きな好きな踊を踊りとうございます。この凡人の胸に巢食ふ憂さの衣、惱みのヴェールを脱ぎ捨て、素裸で……」「え、裸で？」「哀しみも苦勞も打忘れて、一生涯踊りつゞけられたら」「おい、待て／＼。誰も見てない所で踊が踊れるのか？」「お判りにならないでございませう、ではかつぽれを踊りませう。ヨイ／＼ヨーイトナ…」

『春のおどり』から

恩地かつ子

「春が出て來てツイ誘はれて、……」これは只今、私が踊つて居ります『春のおどり』の第七景、食滿先生の長唄の一節でございます。私は去年の『春のおどり』から初めて松竹座の舞臺に立ちました。そして今年も春が出て來てツイ誘はれてしまつたのでございます。御存知の樣に私の出場は三つございます。第三景の珊瑚と五景の紅玉、七景の眞珠と申す、わたくしには少々荷が重過ぎるかたちなのでございます。又その上珊瑚、紅玉、眞珠と云ふ高價な寶玉を一身に纏ふとは些か贅澤な樣にも思はれまして大變、氣がひけるのでございますけれど、時は春ですもの、どうぞ大目に見てやつて下さいまし。舞臺の感想ですつて。凡そ、その舞臺を踊つてゐる者に感想を御聞きになるなんて、皆樣は本當に殘酷ですわ。でも、仕方ございません、春に免じて御答へ致しませう。三景の世之助は何と申しても大役ではあり、複雜な感情が込められてゐる場なので、私と致しましても充分研究もし、色々と苦心しながら踊つてゐるのでございます。どなたです。西鶴が地下で嘘でもしてゐるだらうなんて仰言るのは。いゝえ私にとつては嘘どころの騒ぎか、本當にこの世之助に泣かされ、惱まされるのでございます。恐ろしい世之助です。昭和の御代になつて迄わたくし達を惱殺するのですもの。冗談はさて置きこの踊りは思ひ入りが多いのと振が大きいために六ケ敷いのだらうと思つて居ります。兎に角私には苦手な踊なのですそれに比べると五景の『ぼんさん』の踊りは、心からのどかな氣持で踊れます。朗かな春日和の日に小坊主共が何の屈托もなく浮かれ出すと云ふのですから踊つてゐながら自分でも自然に面白う、可笑しい心持になつてしまふのです。この踊りは何の心配もないのですが、その代り體全體を休みなく動かす踊なのですから踊つた後では唯もう氣が遠くなつて終ふ程疲れます。次の七景春駒の踊りは別にこれと申す變つた點はございませんそれからもう一つ。三週目から例に依りましてラストのアンコールに春駒の衣裳で顔見せとやらに出なければならない樣になりました。これが、どうにも癪にさわるのでございますね。何故つて、私には春駒が濟むとすぐお風呂に飛んで行けたのに、今では全部濟まないと、お風呂に浸れなくなつてしまつたのですものそれと申すのも皆樣が余り喝采（アンコール）して下さるせいだと恨んで居ります。今年の『春のおどり』で、むかつくことが、たつた二つございます。皆樣、何と、世之助とアンコールだとは。



ガクゲキ談餘

目下開演中の道頓堀松竹座の「春のおどり」は絶讃、絶讃、また絶讃で、滿都の大拍手大喝采を浴びて、いよいよ四月中旬まで日延べ續演と決定したその日松竹座の三階の樂屋に陣どつてゐる踊子の瀧、澄子、若山千代、東條薫、河邊月子、衣笠桃代の五人、春のおどりが、四月中旬まで打續けると聞いて「あゝ世は陽春、やがて櫻花が開くであらうと云ふのに、わてら毎日〳〵々々唄ふて踊つて、ぎようさんつめかけて來たはるお客さんの顔を舞臺からぎやくに眺めたかて、たどん屋の店先をのぞいたやうで、花見團子のモンタージュにならへん、どないしたら、この春を惜むところの憂鬱な感情が緩和されるのんや、ようし、ひとつ、春のおどりをこさへた諸先生の惡口云ふたら溜飲がおりるかも知れへんと」敬虔敦厚そのものゝ如き、樂劇部の諸先生の仇名をつけもつけたり一打ちかく、左にそれを發表すると。

樂劇部主事千葉吉造先生「さの半のてんぷら」「詳解」道頓堀さの半の二錢のてぷんらを一覽されたし。

作歌食滿南北先生「ろつぽん」「詳解」南北翁の足の指六本あり。

邦樂作曲杵屋正一郎先生「ぽん引き」「詳解」ついひきたがる。

洋樂作曲松本四良先生「セザレ」「詳解」表現派映畫カリガリ博士の眠男セザレ。

洋樂作曲鹽尻精八先生「ごんぼ」「詳解」牛蒡のことなり細く色黑く艶あらず。

邦舞振付花柳輔藏先生「たーさん」「詳解」クン〳〵喉を鳴らす。

洋舞振付江川幸一先生「じぞさん」「詳解」地藏尊、涎掛けをあげなくてはならない。

舞臺指揮大森正男先生「MO」「詳解」大森正男の頭字なり下へ？字を附すと面白いこの仇名の發表を見た舞臺裝置の山田伸吉先生しやなりしやなりと五人の樂屋へはいつていつて、いやどうも諸先生につけた仇名は實にうまい文學的要素と味覺に訴たへるものがあつてどれもこれも傑作ですよ、ところであの中に僕の名がぬけてゐましたが僕は、一寸これでなか〳〵いゝ男振りで、常々身がまへしてゐるので、仇名をつけるすきがないでしようがなとオホンとばかりに五人に云へば、五人口を揃へて山田先生に「いま、どないつけよかと五人考へてゐるとこだんねん、明日おいなはれ」にギヤフン。

エドモン・ド・ロスタン原作
楠山正雄飜譯・額田六福補綴

白野辨十郎 五幕

角座新國劇上演

京都四條南の芝居　慶應二年の春、市川紋十郎一座の芝居ではこれから伊賀越道中雙六の沼津の段が始まると云ふので見物席は驕然たるうちにも非常に緊張してゐた。その見物席のなかには浪人の大山六平もゐる、通人もゐる、藝者子供もゐた一類り市中巡見を鼻にかけた新選組の浪士と血氣な土佐の浪人の喧嘩が濟むと、そこへ京都守護の任にあたる朱雀隊の新參者で美男の來栖生馬が講家の薫影と見物に來た生馬は近頃高貴の方の姫君を人知れず戀してゐた、がその名を知らうと云ふので顏の廣い薫影を盛り場に連れて來たのであつた。やがて二階桟敷の簾が上ると、生馬の戀人が現れた。薫影の口から甘露寺家の落胤千種姫と聞いて、生馬の眼は異樣に輝いた姫の背後には當時權勢並びなき九條家の諸太夫で、窃に姫に懸想してゐる根岸土佐守と富小路の馬鹿殿もゐた掏摸！　薫影は青くなつてその後を追つたので生馬も思ひを殘してそれに續いた。沼津の段の幕は開いた。重兵衛に扮した市川紋十郎が花道へかゝると、突然朱雀隊の侍で鼻の偉大ので有名な白野辨十郎が花道へ飛び上つた白野は紋十郎にこの京の舞臺へ二度と上らぬと云ふ約束をさせたことがあつたので、刀にかけて芝居を止めさせた。見物は沸いた根岸等は白野に突込んで來たが、却て彼に遣り込められたので、用心棒の有馬が出て白野と果し合を始めると、何しろ相手が日本一の腕前の上に詩人の白野だけに、即興の歌を詠み乍らたう〳〵有馬を倒したので、見物はすつかり白野に魅せられ、三々五々引揚げてしまつた。親友の村瀨とたつた二人になると、白野は急に頂垂れて自分の胸の悩惱を村瀨に打開けたが、なにしろ相手は容才兼備の高貴の千種姫、自分は世の嘲笑の的となつてゐる醜い偉大な鼻の持主、白野はさう思ふだけでも失戀を自覺して萎れてしまつた。村瀨は相手の千種姫は白野の從妹であるし、又有馬との果し合で白野の腕に感心してゐたから、努力一つで戀が叶ふかも知れないと慰めてゐる所へ千種の侍女が明日窃に來てお目にかゝりたいと白野に告げた。急に白野に活氣づいた。途端に薫影が眞青な顏をして飛んで來て、かつて醉興の餘り鳥羽繪で描いた根岸の似顏繪を四條小橋の秩にはつたのを遺恨に今百人餘りの根岸の手勢が自分を待伏せてゐるから助けてくれと哀願した。姫の一件の勇氣百倍した白野は勿論快諾して四條小橋へと繰込んだ。

其日庵雷藏の料理茶屋　白野辨十郎は昨日千種姫とこゝで會ふ約束をしたので、今朝は早くからやつて來て一生懸命に姫への戀文をかいてゐると、似而非宗匠連が雷藏を煽てゝ御馳走にありつきワイ〳〵騷いてゐるのを幸ひ、雷藏の女房おりんが情夫の侍と夫の目

を忍んでゐるので、白野は例の持前の氣性で、その侍を撮み出してしまふと、千種姫が來たので、白野は有象無象を剛室に追込んでおいて姫を迎へた。二人の間には幼い頃の思出が取交された。彼はもう有頂天になつた。然もその姫の口から來栖を取持つてくれと頼まれた時の白野の心、然し彼は自分の鼻の醜さを直覺して自分の戀を捨て、來栖を取持つことを誓つて姫を歸した。そんなことゝも知らず朱雀隊の隊士は昨夜の勇士を歡迎しにやつて來た。そこへまた根岸が怨み重なる白野を誘き出しに來たが、却て白野の爲に侮辱され憤然として歸る。と、朱雀隊の侍は來栖を新米扱ひにし、勇氣があるなら白野の前で鼻の事を云つてみろと煽動するので、若氣の來栖は白野が話してゐる昨夜の四條小橋の手柄話に鼻の字をつかつて夢中に茶化した。鼻を苦にしてゐる白野は一旦怒つたが、隊の連中を遠ざけ、來栖に千種姫の意中を傳へた。來栖は夢かと喜んだが戀の言葉一つ知らない田舍侍の自分を顧みると急に頂垂れるので白野は來栖に自分の戀文を與へ、戀の助太刀をする事を誓つた。

洛東高臺寺附近千種の假住居

其日庵雷藏は女房に逃られて、今では白野の口きゝで、こゝの庭掃除になつてゐる。白野が小督の曲を吟じ乍らやつて來たので、千種姫はいそ〳〵と庭へ下りて來栖が美文家であることを話す。無論來栖の美文はみんな白野が代筆してゐたので、白野は櫟つたい。根岸がやつて來る。白野は姫に强ひられて仕方なく隱れた。根岸は自分が今度九條家等の引立で歩兵奉行になつて長州征伐に向ふから、朱雀隊も戰地に送り白野を戰死させてやる積りだと得意然と語るので、姫は朱雀隊と聞いて來栖を戰地に送りたくないばつかりに白野に復讐するなら寧ろ朱雀隊を戰地にやらないで白野を脾肪の嘆に堪えなくさせた方がいゝと、うまく根岸を騙し朱雀隊を京に殘すやうにさせてホツトする。それをまた根岸は姫が自分に好意を持つてくれるものと自惚れて意氣揚々と戰地に向つた。姫は白野には根岸との話を打開けずに腰元と隣家の會へ行つてしまつた。來栖が來た。彼はもう白野の人形となつて姫と戀を語るのに飽きたから、自分の獨力で姫の心を得るんだと駄々を

こね出したが、白野は冷笑し、折から姫の戻つて來る氣配にまた隱れてしまつた。千種姫は來栖に「月による戀」の歌を要求した。來栖はグーの音も出ない。姫はプツ〳〵怒つて家へ入つてしまつた

「いよう大成功」と白野が飛び出した。結局、闇を幸ひ白野が來栖に代つて姫の部屋の下で姫の心をそゝり來栖をその部屋へ追ひやつた。醜い白野は自分の口から出た詩で姫の心を得たのをせめてもの滿足にしてゐた。祇園の神官が根岸の手紙を持つて來た。白野は姫を呼んでその手紙を渡させた。その手紙には祇園の社で待つてゐるから姫に來いと書いてあつたが、姫は卽座の頓智で根岸が神官に千種姫と來栖を夫婦にする祝詞をあげるやうにと書いてあるからと欺いて、白野には若し根岸が來たらこゝで防いでくれと頼んで、來栖と神官とを連れて家へ入つた。案の狀根岸がやつて來た。白野は口から出まかせのことを云つて根岸を釣つてゐるうちに祝言は濟んで姫と來栖と神官が出て來た。根岸は口惜しがつて戀の遺恨に朱雀隊出征の教書を來栖に渡して去つた。姫は泣いて白野に戰地に於ける來栖の事を吳々も頼んだ。

周防國玖珂郡小瀨川幕軍の陣營　幕府の軍は却て長州軍の爲に兵糧攻めにあひ、さしも血氣の朱雀隊の面々も空腹を堪へかね野營に力なく眠つてゐる。白野は士氣を鼓舞しやうと一同を呼び起してお國節を唄はせると、いつの間にか一同は空腹を忘れて望鄕の念に顏を見合せる。今度は鼓手の一人に太鼓を打たせる、今迄萎れてゐた一同はハツとして立ち上つた「そら見ろ太鼓一つ叩けば夢も惱みも故鄕も戀もおさらばだ」と白野は會津魂に會心の笑を浮べた。そこへ根岸が來。朱雀隊で自分の惡口を叩いてゐると云ふ噂だから、そのお禮に悲々朱雀隊をこの危地においたが、半時もすると敵の襲擊の的になるだらうと嘲つて去つた。白野等は根岸なんか相手しない。白野はまだ呆然と千種姫の夢を追つてゐる來栖に千種姫へ奧る來栖の代筆の手紙を見せた。來栖がその手紙に涙の跡を發見すると白野は作り事でもいつかその境遇につまされたと辯解したが、來栖は不審がつてその手紙を引つたくつた。途端に白馬に乘り、其日庵雷藏を從へて千種姫が來栖戀し

さの女の一念で遙に京都から敵地を通つて來た根岸もやつて來て千種姫にその無謀を責めて、京へ引返す樣に勸めたが姫がきかないので呆れて行つてしまつた、雷藏は手料理や酒を出した。さあ朱雀隊は急に活氣立つた。根岸はまだ姫に氣があると見えて巡羅にことよせてやつて來て、みんなと決死隊の勢揃を見に行つた白野は來栖と二人切りになると實に自分は今迄に一日に二度づゝ千種姫に彼の名で戀文を出してゐたと白狀するので、初めて來栖は白野が姫を戀してゐたことを感じた。姫が戻つて來る。白野は逃げた。姫は來栖に生死の境の戰地で日に二回も手紙をくれた眞心を感謝し、今迄は來栖の容貌に魂を奪はれてゐたが今では例へ容色がどんなに醜くとも手紙を通して詩想饒かな心に身を捧げると誓つた手紙を通しての心――それこそ白野の心だと知ると來栖は堪りかねて姫を外させておいて白野を呼んで姫の今の心持を告げ、此上は姫に二人の中の一人を選擇して貰はうと去つた。白野も興奮して姫に自分の胸を打開けやうとした。その時、來栖が敵の第一彈で倒れたと云ふ知らせと共に戰爭は始まつた、白野は來栖の死骸に泣伏してゐる千種姫を根岸に托して戰地を去らせ、自分は姫の布紗を朱雀隊の旗印にし浮き腰の立つた隊を纏めて千種姫の名を呼び乍ら敵軍の中へ割つて入つた。

京都五條坂邊の金光院

明治十四年の秋の夕暮――尼寺の前庭には金色の落葉が音もなく散つてゐる。院主が小さな尼僧等とさつきから頻りに孤落な白野の噂をしてゐたが、千種姫が今は陸軍少將に昇進した根岸とこつちへやつて來たので、院主達は本堂の方へ去つた千種姫は戀人の來栖が戰死してから名も淨明とあらため、十四年この方尼院で操をたて通して來た。その尼の千種姫を根岸も亦十四年間根氣よく口說いて來たのであつた。勿論千種姫は來栖を生けるものゝ如く墓つて根岸の言葉など耳へも入れなかつた。丁度そこへ村瀨が來た。話は勢ひ白野の噂になつた。根岸は、昔に變らず豪傲の爲に尾羽打枯らしてゐる白野を嘲笑した上、暗殺の風說もあるから注意してやれと云ひ捨てゝ千種に送られて歸つた、ところへ今では市川紋十郎一座のあかり掃除をやつてゐる例の其日庵雷藏が

顔色を變へて白野が往來で材木を頭に落されて重傷を負つたと知らせに來たので村瀨は彼と白野の家へ飛んで行つた。千種姫は根岸を送つて戻ると、吉祥天女の刺繍をし乍ら十日目には必ず訪問する白野を今日も心待ちに待つてゐた。十四年來初めての遲刻をし、古いモーニングに黑い帽子を目深に冠つた白野は仕込杖を便りに氣息庵々として來たが、豪膽其ものゝ樣な彼は强ひて平靜を裝つて、姫に色々世間の出來事を聞かせたが、刺繍に餘念のない姫も流石に彼の異狀を感じて近づいた。白野はその姫に切願して姫の胸の下に祕めてゐる來栖の血の滲んだ最後の手紙を見せて貰つた。而も白野が文目もつかぬ夕闇にそれを聲高々と、さも懷かしさうに誦んずる聲に姫はハッとした。その聲こそかつて高野寺傍の千種姫の佗住居の下で闇のなかゝら姫に戀を訴へた來栖の聲である。さてはと驚き姫は初めて、今迄の來栖の戀文は總て白野の代筆でその戀文を通して自分への眞心は總て來栖のそれでなくて白野の眞心であることを知つて、ワッとばかりに彼の膝に泣伏した。村瀨と雷藏が引歸し、姫に白野の一大事を打開けた。白野は「十月十六日、夕食前、白野辨十郎氏暗殺せらる」と自ら帽子を脫げば、頭の繃帶に血が滲み出てゐた

さうして白野は千種姫から今こそ心から白野を愛すると云ふ言葉を聞くと、突然勢ひよく立上り夢遊病者の如く仕込杖を拔いて折柄迫る死神と渡り合ひ淸淨な空を通つて月の宮居にたゞ一つの自分の寶、甲の龍頭の鼻を抱いて登仙するのだと豪語して遂に倒れてしまつた。心あつてか本堂の方から佛樂の音が響いて來た。

△　△　△

東京新名物

登録商標

丸元祖元

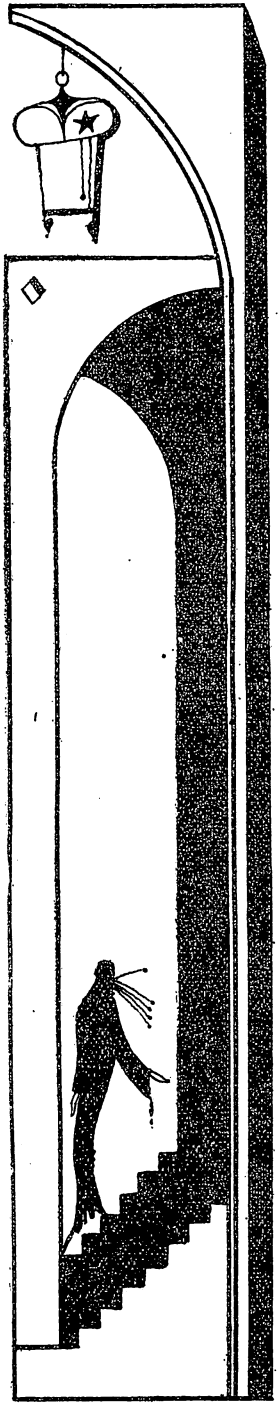
富貴豆

御上京、御歸阪の節は
是非!! 万人向の
ハマヤの『富貴豆』を
御利用願上ます

地方より御注文の節は
荷造費運賃共御買上の
一割を頂き不足分は當
店で負擔致します

濱田三樹謹製

製造發賣元
東京
日本橋區蠣殼町三丁目
十二番地　中ノ橋際
市電（水天宮ヲ車）
ハマヤ商店
電話浜花二六三〇番



第一劇場の『嘆きの天使』を見て

堀　正　旗

更新再興の第一劇場のスローガンの中に、「この劇場はあらゆる困難を排して、遺傳的な固疾的な過去の一切から訣別して進み、新しい分野を開拓しなくてはならぬ。古いものを清算すると同時に、絶えざる努力をもつて實際的に創造を發展させなくてはならない。」といふ言葉がある。今度の第一劇場の復活公演が、實際にこのスローガンに立脚してその陣容を建てたものと假定して、上演脚本を一瞥するとき、この趣旨に最も相應したものは「嘆きの天使」であると思ふ。

猿之助の春秋座が松竹を脱退して、第一回旗揚興行に上演したのが「アジアの嵐」であり「嘆きの天使」と同じく映畫を演劇化したものであつた。猿之助、壽三郎といふ東西歌舞伎俳優の新人が、その更新再興の第一回公演に、期せずして映畫を演劇化した脚本を上演したといふことも、偶然とはいへ面白い現像である。しかし「アジアの嵐」が頗る不評であつたに反して「嘆きの天使」が相當の好評を獲得したのは如何なる理由に據るのであらうか。勿論映畫のストオリーそのものが「アジアの嵐」に比較して「嘆きの天使」は演劇的要素を多分に含んでゐるそこに根本的の勝因があるとはいふものゝ、脚色者としての

森田信義君の手腕が遙かに傑れてゐたことも重要なる原因であると僕は確信する。

「アジアの嵐」の脚色が、たゞ徒らに映畫の物語に追隨してその筋を運ぶことのみに重點を置き、その結果は演劇的構成と効果とが第二次的に驅逐せられてしまつた。これがために場數のみ無暗に多くて、しかもそのどの場面にも所謂るもり上る箇所がなく、頗る平面的な退屈なものが出來上つた。演劇と映畫とは各自異つた立場と要素とを持ち、從つてその手法も同一ではない。映畫を演劇化するためには、その筋を忠實に辿ることも必要であらうが、それにも優してドラマツルギーの篩にかけることが重要である。

この意味に於て森田君の「嘆きの天使」の脚色は實に滿點ともいふべきで、その構成の點に於ても、ストオリーの壓縮と連絡の點に於ても、また舞臺効果の上に於ても非難すべき何物もない「嘆きの天使」好評の殊勲者として、よろしく森田君に金鵄勳章を授くべきである。

この名脚色を基礎として、野淵祀君の周到緻密なる演出振りが、各場面毎に窺はれる。殊に第一幕の教室の二場面が傑出してゐる。何んでもないことのやうであるが、あの學生達の活々とした茶目振りは、殊更らにえぐればわざとらしくなるし、さうかといつて控え目にすれば分別臭くなつて、なか〳〵むつかしいものである。それにも拘らず野淵君は學生の潑剌とした惡戯氣分を愉快に横溢させてゐる。

我々はこの戯曲によつて、學生達の惡戯が動機となり、謹嚴なるウンラート博士がつひにその一生を拋つてしまふといふ悲運を見せられる。しかし、そのウンラート博士に同情の念を感じながらも、何故だかその學生達を憎む氣持にはなれない。そしてそれでいゝのだ。そこにこそ野淵君の演出の周到さが躍動してゐる。何故ならこの戯曲のねらつてゐる點は、底意のない學生の惡戯が、如何にウンラート博士を深刻なる運命に突き落したか、といふことであるのだから、從つて教室の場に於ける學生の惡戯は、底意のある憎々しいものであつてはならない。それは飽くまでも無邪氣な惡戯であればある程より効果的なのである。

第二幕第一場の、波止場近くの酒場の幕切れは、ウンラート博士の苦惱と煩悶とを内面的に表現させてゐたが、あれは寧ろ正反對に、うんと外面的に高調して表現させた方がよくはなかつたかと思ふ。さうした方が後のキャバレーの場で、ウンラート博士が氣狂ひになる氣持が強く明瞭に觀客にアッピールするし、芝居としてももり上るからである。いづれにしても全體的に野淵君の演出に對しては敬意を表せざるを得ない。

最近レヴュウにばかり手を染めてゐた大森正男君が、久し振りに舞臺裝置を受け持たれたことは大いに喜ぶべきことである寫實を基調としたあの舞臺裝置には、洋行して親しく獨逸の風

物に接してゐるだけに、彼地の色彩が遺憾なく漂ふてゐる。或る人々は舞臺轉換のテンポが遲いと非難するが、現在の浪花座の舞臺では、あれ以上の急速さを求める方が間違つてゐる。僕としては最近の道頓堀に於ける舞臺裝置中の傑作だと斷言して憚からない。たゞ學生の冠る帽子が黑色であつたが、あれはやはり獨逸の學生帽のやうに派手な色にした方がよかつたと思ふ

俳優としては何といつても壽三郎のウンラート博士が出色の出來榮えである「償金四十萬兩」以來の名演技だ。同君の缺點とも思はれてゐた白科の含み聲からも、完全に脫出してゐるそれにあのかつらが素晴しくいゝ。日本でもあんなかつらが出來るのかと意外に思つた位ゐである。これについで扇雀、深見松井、成太郎の學生が素直でいゝ。橘三郎のキーパートもその人らしかつたが、古川君のアルバートは一寸柄違ひの感がある

國民座で餘り二枚目をやつたことがないのだから無理かも知れない。河村菊江のローラには少からず閉口した。あれではいくら最貧目に見ても精々天勝孃位ゐのところだ。せめて石河薫にでも演らせたら、もつとよかつたらうと思ふ。

兎に角、言ふべきことは多々あるが、指定の枚數を越えるので擱筆する。再度の第一劇場公演を期待すると同時に、その座組みの俳優に就て、當事者の愼重なる考慮を煩はしたいと思ふ

全國著名遊覽地御案内

御料理旅館
むさしや
奈良三笠山麓
電話 七二〇〇番 七三〇〇番

大垣公園城畔高台
本店 吉岡樓
電話一〇八・一七九番
有史以來間常設舞台各種宴會好適、市街一望ノ佳所ヲ占ム
養老公園眺望最絶中央高台
支店 千歳樓
電話一八・一〇七番
別館 全感流 芳閣
呼亭
最モ光榮アル歴史ヲ有シ、親族宴、月四季眺望絶佳、番官顯揚宴ノ高級旅館トシテ諸設備完全

理想ノ避寒好適地
相州湯河原温泉
伊豆屋旅館
電話湯河原局一二番
仝 別館
電話 一二三番
地震には絶對安全

東海道に尤も近き山の温泉
別天地
伊豆新古奈温泉
見晴山の大湯
松仙閣 白石館
電話伊豆長岡二九番
三島驛、沼津驛より自動車、電車にても卅分 地震の絶對安全地帶

關西線笠置驛ヨリ三丁
御料理旅館 笠置館
笠置溫泉
京都府笠置(木津川畔)
電話 局 六五番

本欄ノ廣告ハ左記ヘ御申込下サイ
『道頓掘』廣告取扱所
三省舍 中江三省
大阪市住吉區阪南町東三
東京市赤坂區靈南坂町八

舞臺は廻りつゝある

森田信義

舞臺は廻りつゝある！

演劇變革はいつ來るか？　などゝ、考へる人達は（大多數の演劇關係者は然り）愚かである。非常なる認識不足である。

演劇變革は既に起つてゐる。

舞臺は既に廻りつゝある！　ゆるくゆるくではあるが。

演劇に於ける變革は、それの貧ふてゐる種々なる先在條件に制されて、到底、他の藝術變革のやうな、迅速な、飛躍的な、徹底的な變革を期待することは出來ない。

先在條件とは何か？　まづ技術的條件、物質的條件、經濟的條件等を擧げることが出來る。

技術的條件に就いては說明する迄もあるまいと思ふが、例せば俳優訓練である、俳優演技の新しい組成的なシステムを作ると云ふことが、急速になし得る事であらうか。

物質的條件。第一が劇場建築である。次には――これは技術的條件と相關してゐるが――物質的の構成物、機械的的設營その他である。演劇以外の諸藝術が、その新しい精神に應じて姿を變革する場合に、決してぶつゝかる事なき障壁である。

經濟的條件に至つては、繪畫は一箇の製作品に對して、金を支拂ふ能力のある一人の愛好者を得れば成り立ち得る。小說だの、詩だのは全國中に纔に千人、乃至はそれより稍多くの支持者を贏れば、解決する。が演劇の場合は、さうは行かない。

即ち、演劇は、如上の大きな制限を擔つてゐる以上、恰も、重い殼を運命的に脊負つてゐる蝸牛が、運命的にのろのろ歩きをするのやむなきと同樣、きはめて徐々たる進歩發展しか期待する事は出來ない。

演劇革命の相貌は實に右の如きである。

この相貌は必然的に、決して派手ではあり得ない、じみである。

である。が故に、假令演劇關係者であつてさへも、近視眼的な人達にあつては（噫、その種の人達の如何に多き事よ！）往々にして辨別され難い、看過され易い。また、對象の具性に對する省察をなすことなき、唯、もう「派手な變革」をのみ、望み夢見る、所謂闘志熾んなる人達に取つては、妄斷されさへする。

が、それらの人々の嗤ふべき、氣の毒な、認識不足を他所にして演劇變革は成されつゝある。

舞臺は廻りつゝある！　――ゆるくゆるくではあるが。

例せば「第一劇場」のあのスローガンを、行動を、變革のどよめきの一つとして聞く事は出來ないだらうか。廻りつゝある舞臺の一齣として視る事は誤りであらうか。

舞臺は廻りつゝある！

高谷伸著

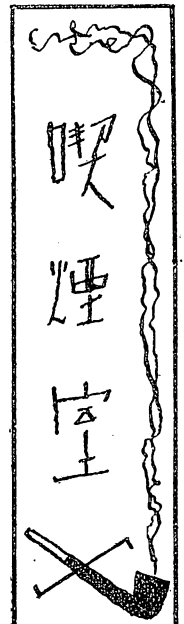
芝居のみかた

裝訂　木版極彩色の美しい和裝

內容　誰にも面白い芝居の常識と演劇史

定價　三十五錢
送料　四錢

發行所　上方趣味社
兵庫縣武庫郡今津町巽一七〇五
振替大阪五四三二二番



規定

皆様のための解放欄です。振って御投稿下さい。用紙はハガキ字體は明瞭に廿字詰のこと。

讀者からの讀者へ

◇今月東様は何處に如何してらつしやるかみな様御存じ？いとせめて戀しき人の噂など傳へ來よかし今日は喜熨斗様の處に參るつもりですの、來月は是非美しいお姿を樂しみに……新町の玲子様どうぞよろしく。東様のみ聲ですつて、なんだかあの目で笑つてらつしやるお顔が浮んで參りますわ、姿、あのふや〳〵した藝が大好きですのいつも美しいお芝居ね、東様の邦劇座は春になれば公演をなさるやうに以前に伺ひましたけど、若しみな様御存じでしたら何卒お敎へ下さいまし。一様も義直様も大いに御奮闘遊ばせ、松島家黨萬歳を祈ります。（島の内むらさき）

◇第一劇場三月公演の「嘆きの天使」は興深く觀劇しました。壽三郎の努力大いにみとめ將來の成功を祈る次第です。四月水谷孃が寶塚へ來演とのこと、五月には是非壽三郎、水谷、石河薫の合同劇を大阪で演つて欲しいと思ひます、水谷と石河の顔合せはたしかにセンセーションなるものだと思ひますので。（中之島ナオミ）

◇再興の壽三郎氏へ絶對的なる期待を掛けます、只石河さんの無いことをちよつと淋しく感じます、その昔黑づくめの艶麗なる後姿を雨の心齋橋筋に見染められてより、氏の好きな助演者として第一劇場になくてはならぬ君でしたのに、だがそれに代るべき名花もあり氏獨得の天地に雄飛されんことを切に祈ります。（京都SS生）

◇島の内のむらさき様、私も大の松島家黨です。何卒お仲間に入れて永久に御交際下さいまし。お差閊へなかつたら來月の誌上で御住所御本名をお知らせ下さいまし（島の内松子）

◇私、新國劇が一等好きなんです。島田様辰巳様など若々しいあの熱演をみる時にいつも春のやうな心のときめきを感じます。新國劇黨の皆様何卒誌上で御交際を。（天滿ゆかり）

◇四月には僕の大好きな志賀廼家淡海君が浪花座へ歸演すると思つてゐたのにすつかり期待を裏切られて落膽した淡海君よ充實した一座を造つて一日も早く道頓堀へ歸つて來て吳れ。（難波菊吉）

◇新町の玲子様、島の内のむらさき様といふ松島家黨を喫煙室に見つけ出しました。來月は本欄で松島家黨オン・パレードを行はうではありませんか、ねえ、ねゝゝゝお二方勿論賛成でせう。（曾根崎梅香）

◇神戸の春子様へ――氣の小さい方だなんてよけいなおせつかいは止して下さい。私はこれでもまだ純情なんですからいくら右太衛門様に失戀をしたつて牛を馬に乘り替へるやうなことは眞平御免です。（道頓堀くれない）

◇緊急動議を提出いたします。度々來演する新國劇のために私達は此際至急に新國劇後援會を組織したいと思ひます。吾等の同志は奮つて來月號の本欄で住處姓名明記の上その意を御發表下さい。（小橋西の町川口）

◇家庭劇の賀川清様、妾はあなたの大ファンです……なんて此欄で私が言つたつてどなた

も本當にはなさらないでせうけれど、嘘だと仰有れば妾、指でも切つてみせますわ。賀川黨の皆様何卒々々本欄で大いにお仲よしになつて下さいね。（蘆屋はね子）

◇僕は中座黨なんだ。三月の五郎劇三十年記念興行のあの素晴しい盛況は如何だ。遠に喜劇王五郎オン大の苦闘の跡が偲ばれるではないか、フレ〳〵五郎劇！（船場船越生）

◇飛鳥明子姉様――春のおどりのあの素晴しい御容姿！　妾はいつもあなたの舞臺に接しるとき、あなたの情熱に胸を打たれるのです姉様何卒永久に健かなお姿を松竹座の舞臺にお見せ下さいまし。（北濱勝美）

◇松竹ガクグキ部黨の皆様！　新參者の私と御交際下さい。もう永久に舞臺ではみられないと思つてゐた香椎園子さんの舞臺に接しることの出來るのは私達の何より幸福です。香椎さんを初め瀧、若山の諸姉益々御奮闘の程をかげながらお祈りします。（奈良香幸）

◇新聲劇辻野様の御病氣は癒つたでせうか、諸兄姉の中で御存じの方があつたらお教へ下さいまし。私は大の新聲劇黨でその上辻野様が大好きなんです。女優の方では富士野蔦枝様が親切なお姉様のやうに思はれてなりません、新聲劇黨の皆様大いにおふるひ下さい。（十三千鳥）

道頓堀メロディー

塚本篤夫

戀の仇花
咲いては萎む
泣けば涙の
道頓堀よ
來いと云ふよに
眼を潤ませる
ジャズの酒場の
女給（ウエトレス）

赤い似顔繪
役者の寫眞
ぐるりとりまく
あの娘（こ）や　この娘（こ）
嬉しマーチに
おくられながら
浮くは水（み）の面（も）の
戀の舟

見たか浪花座
きいたか花日
飲めば飲んだの
赤玉食堂
酔へば思ひに
心が亂れ
手練手管に
花が咲く

襟についてる
安白粉は
浮いて浮かれた
今宵の名殘り
ゆくもかへるも
ほろ酔ひ千鳥
色と情の
芝居裏

蒲田映畫

菊池寛原作

『有憂華』

監督　清水宏・脚色　村上德三郎・撮影　佐々木太郎

二人だけで話したかつたからでもあるが、藤野秀作は沼津の別莊にゐる從妹綾子から呼ばれたので一人で訪ねて行つた。愛する者の語らひは夢のやうに幾日かを過した。

伯父の愼藏に無斷で滯在して來た事は無論惡い事には違ひなかつた、しかし秀作は滯在中彼女の身體には指一本さへ觸れぬ淸純な態度をとつてゐた。それを冷酷な伯父は曲解した、疑はれた秀作は激怒と悲憤とで二度この家の敷居をまたぐまいと誓つて伯父の家を出た。

光枝は深夜下忍池畔をさまよひ、自殺の怖れあるとの理由で警察へ保護された、秀作は兄として警察へ喚ばれ妹を引きとつた。

光枝は愼藏の息時雄とは單なる心の關係以上の關係があり、愼藏が何とはいふと彼女との結婚を望んでゐた時雄だつたそれにも關らず香代子と結婚して光枝の心を無慘に蹂躙した、彼女が兄に涙ながらに語つてゐる時、時雄は香代子を連れて新婚の旅路の甘い歡樂に醉ふてゐた。

純なる者を疑ひ、不倫の子の父なるを恬として恥なき愼藏を詰問すべく秀作は愼藏の家を再び訪ねた。伯父は言を左右し詭辯を弄した、秀作に彼を冷血漢と罵り打ち据えんとした。傍から綾子は父の無情を嘆きつゝ秀作をなだめんとした。

彼女には今結婚話が迫つてゐた、父の事業の犧牲となり富豪小串の妻となるのであつた。愛なき結婚、骸はかりの妻、しかも遠く北海道へ行かねばならない、彼女は救ひを秀作に求めた秀作は聞いた瞬間驚いた。相愛の彼女である、けれど憎むべき愼藏の娘なれば彼女との結婚は意地でも斷念すると云つた。

邪の父、正の愛人綾子の心は決つた。――父も捨てる、家も捨てる、そして秀作兄妹と三人で暮さう。しかし今の秀作には慾ひに綾子と接近して再び愼藏から兎角の事を云はれたくなかつたのだ。彼は薄情に、冷淡に彼女を殘して伯父の家を出た。

綾子の悲嘆の幾分は秀作の心にもないではなかつたが、唯だ伯父に對する激憤が凡ゆる感情を燒きつくして、只管に强くなる事のみ欲した彼のみではなく、妹光枝も共に。彼は可憐な妹を勵まし、鞭つた。――新聞の演藝欄に「東京小劇場の新スター」なる標題で光枝の寫眞が掲

載されたのはそれから間もなくであつた。それは秀作が劇團の演出をしてゐた關係からだつた「櫻の園」が上演される一週間ばかり前に兄に連れられて光枝は劇場へ行つた。烈しい稽古が毎日續けられた。光枝は可憐なる**アーニヤ**の役だつた。

綾子が訪ねて來た、秀作は頑として會はなかつたが、光枝は歸つてゆく綾子の後姿を追ふて會つた。綾子は北消道から毎月の小遣を送る、そして光枝の藝術上の**パトロン**となるを誓ひ、光枝の成功を祈つた。

優しい綾子の言葉に光枝は感謝しながら、彼女を捨てた兄の許しを乞ふた。

秀作の心は綾子にもよく解つてゐた「運命よみんな哀しい運命よ！」――彼女が北海道で懊惱の日を繰りかへしてゐる時、女優としての光枝は大成功に批評家の賞讃を浴びてゐた。

しかし彼女の運命は何處まで皮肉か？　怖るべき日が彼女の身の上に來た。

姙娠！　それは時雄の種でなくてなんであらう。しかし一座の俳優川瀬英吉に友情以上の好意が動きそめてゐた。彼女は二重の苦惱を小さな胸に秘めてしかも華やかな脚光の下に踊つた

或る日光枝のもとへ花輪が贈られた其主は川瀬を蟲屋にしてゐる林田夫人と共に訪ねて來た香代子だつた、彼女は安富と名乘つて來た。光枝は香代子と同乘してゐるのが不快に思はれた

やがてはじまつた秀作と香代子の交際は急速に親密の度を深めていつた。戀の勘利者をもつて、敗北者の光枝兄妹に對する積りだつた香代子も、はからざりきかつて覺へた事のない熾烈な戀愛を秀作に對して感じた。

秀作は唯だ冷靜に、しかも上面は巧みに彼女の感情をあふる事に努めた。

東京驛階上**ホテル**の一室、今日新婚の旅に發つ川瀬と光枝を見送りに秀作は來てゐた。妹の身も漸く定つたので兄として秀作の面には云ひ知れぬ喜悅があふれてゐた。しかし彼の胸には或る事が秘かに企劃されてゐた、それは香代子と時雄とを別々に誘惑し、しかも今日この場所で兩人を會せしめるのであつた。香代子は既に秀作の手紙に依て時雄の家を捨てゝ出て來た、

時雄夫妻に痛烈な復變をした秀作が光枝を見て「お前は兄さんを馬鹿な男だと思ふだらうね！」と語つた時、光枝は答へた「いゝえ、そんな事は思ひませんわ、けれど綾子さんがお可哀さうだわ！」「他人の事を考へるのはお止し、お前はたゞ自分の幸福に醉つてゐればいゝのだ」

―（**朝日座四月封切**）―

＝キャスト＝

藤野秀作	高田稔
妹光枝	及川道子
安富愼藏	藤野秀夫
息時雄	島田嘉七
妹綾子	若水絹子
時雄の妻香代子	伊達里子
川瀬英吉	毛利輝夫
林田夫人	谷崎龍子
小串信一郎	新井淳

下加茂映畫

林長二郎主演（子母澤寛原作）

紋三郎の秀

——渡邊哲二監督作品——

常州笠間、紋三郎稲荷の神主の悴に生れた秀五郎、若い中から遊び人仲間に入つてやくざ渡世、人呼んで笠間の秀五郎、又は紋三郎の秀といふ男が好くつて俠氣が深く、腕は立つが滅多に刀は抜かない。

江戸ではよく商家の旦那衆が寄つてなぐさみ半分の博賭をやる。その日も朝から皆が寄つて博賭に花を咲かしてゐると、悪旗本の近藤英一郎が何處でかぎ出してか仲間の横淵や十文字と連れ立つて乗り込み、旦那衆を散々おどし上げておいて目的の金を懐中し、揚々と引あげやうとすると、その場に居合はした秀五郎が呼びとめた。場句の果てが刄物三昧　日頃は刀に手を掛けない秀五郎も今日ばかりは本當に怒つてか遂ひに刀を抜いて應戰した。一度抜けば冴えた腕近藤を一刀の下に仆した秀五郎の腕の凄さ——と知つて後の二人は金も何も投げ出したまゝ雲を霞と逃げ出してしまつた。

秀五郎は當時兩替業を營む越前屋庄兵衛の家の奥座敷に養はれてゐた。そこの一人娘お照は兼ねてより本當に男らしい秀に惚れ込んでゐた又お照の父も秀五郎を娘の婿にと内心考へてもゐた。只玉にきずは秀五郎の博賭打ち渡世、そればかりで云ひ出せなかつた。一方秀五郎はお照が自分に惚れてゐる事も知つてゐたし自分もお照を愛してゐたが、自分の身分に不相應な戀の遊びに手を出す事は悪い事だと考へてゐた。

その秀五郎も今はたとへ理窟はあるにしても侍を斬つたからにはこの上江戸にゐて越前屋に止まることは出來なかつた。庄兵衛親娘に別れを告げて當分の旅に出た。

秀五郎がブラ〳〵と下總鎌ヶ谷にさしかゝつた時、秀五郎を呼び止めたのは、江戸からはる〴〵殺された近藤の仇討に同志を味方に追ひついた横淵に十文字が衆をたのんで一突きに秀五郎を殺さうとして斬つてかゝつたが、却つて秀五郎の爲めに一人殘らず斬られてしまつた。

この有様を通りがゝりに松の木蔭から眺めたのが土地の親分魚屋の德藏だつた、德藏は一晩でもよいから自分の家に泊つて呉れと秀五郎に云つたが、秀五郎は却つてそうしたところを見られたのをはづかしく思ひ德藏の申出を斷つて去つてしまつた。

その後間もなく德藏は旅なれぬ娘と連れの老爺に出逢つた。娘はお照老爺は爺やの三作だ。秀五郎戀しさでお照は遂ひに家を飛び出して三作と共に秀五郎の行衛を訪ねてゐたのだつた。

そうと知つた德藏は親切にも子分の音松を走らせて秀五郎を呼び戻らせることにしてお照等を自分の家に伴つた。

秀五郎の後を追つた音松はその途中松原

の下で賭博を開いて百姓達を集めインチキをして金を巻き上げてゐる、この土地では近頃賣出しの親分取手の常太郎に出逢つた。常太郎と德藏の間柄は常から險しかつたがその常太郎が親分の領分を荒してゐると知つた血氣の音松は吾を忘れて飛び込んだが、多勢に無勢却つて散々ひどい目に逢はされる。

一方斯くと知らぬ德藏は音松が梨のつぶてなので第二の使ひを送り、やつと秀五郎をさがし當てさせて吾家にむかへた。

お照が家出迄して自分を追つて來てると知つた秀五郎はお照を意見して江戸へ歸すべく引返して來た。が其時德藏の家では音松が常太郎の爲に殺されたと知り、引續き常太郎から出入狀を突つけられてゴツタ返へしてゐた。然も此中で肝心の德藏は持病を起して床についてゐた。

秀五郎はお照に逢ふと心にもなく强い顏で意見した。堅氣の家の娘が股旅者の後を追ふなんて飛んでもねえ話だ。今すぐに江戸へお歸へりなさい。と、だがお照は泣いていやだと云つて秀五郎を離さない。

德藏は今度の出入りに勝味のない事をよく知つてゐたので、秀五郎に助勢して貰はふと決心した松原で見たあの腕前の秀五郎がねてくれゝばこの勝負も勝ちに違ひないと考へた。然し德藏のこの申出でを秀五郎はあつさりと斷つた。

その夜おそく秀五郎が歸へつてみると德藏一家は喧嘩支度でわき返へつてゐた。然し秀五郎は助勢しやうとは云はなかつた。

德藏始め一同は、今は秀五郎を諦めて出發し樣とした。時に秀五郎は若し自分に一切を任せて呉れるならこの出入りを片付け樣と申し込んだ。德藏は二つ返事で一切を秀五郎に任せた。

そこで秀五郎は單身鎭守の森に行き常太郎に逢つて今度の出入りをサイコロの目で決めやうと申し込んだ。インチキ師を抱へてゐる常太郎は直ぐ承知してお互の繩張りをかけて勝負を爭つたが、インチキは秀五郎の鋭い眼光で見破られ勝負は秀五郎の勝だ。

もう文句の云ひ樣はない。がひきような常太郎はいきなり背後から秀五郎に斬つて掛つた。同時に用心棒も飛出したが、皆が皆只一刀で秀五郎の爲に斬られてしまつた。

餘りのあざやかさに呆然たる常太郎一味の間を悠々と分けて秀五郎は勝負の結果を德藏に知らしに森を去つて行つた。

—（朝日座四月封切）—

脚色　佐々木杢郎・撮影　後藤　武夫

笠間の秀五郎　林　長二郎
魚屋の德藏　坪井　哲
ざんばらの辰五郎　風間　宗六
舟本の伊賀造　井上晴夫
山猫の傳九郎　小泉嘉輔
がんじきの熊造　志賀靖郎
榊原金三郎　永井柳太郎
近藤英一郎　春日清
横淵五郎左衞門　正宗新九郎
越前屋庄兵衞　宇野健之助
娘お照　千早晶子
爺や三作　關操
德藏女房お藤　環歌子
お茂駒　湊明子
お豐　千曲里子
江戸の目明し　浦波須磨子
かんおけやの主人　中村政太郎
高田篤

劇壇往來

曾我廼家五郎一座

創立三十年記念興行

二の替り

——中座——

四月一日初日

毎日午後四時開幕

【狂言】第一、一堺漁人作「愛の上塗」二場第二、鳥江銕也作一堺漁人改訂「おちゝ」一場、第三、一堺漁人作「功名愚談」二場。第四、楠本木念仁作一堺漁人補訂「幸福の渦卷」二場、第五、一堺漁人作「根なし草」二場

【重なる役劇】會社員阪口俊國、武士進藤久馬、溫泉宿の主人惣右衞門、左官井上辰三(五郎)下男藤助、失業者島田、白痴の龜次郎お福の父(蝶六)阪口妻芳子、三左衞門妻數江、宗兵衞妻お德(大磯)婿作太郎、狂歌師春日節齋、大工太吉(小次郎)番頭幸七、師南番進藤三左衞門、分家伊村佐平(一朝)お德の父木村平兵衞、金貸關谷宗兵衞、鰌鍋屋若者(五樂)三河屋若主人光三、召使おむら、旅行團員松村、藝者小夜子(林蝶)結髮師佐藤爲子、惣右衞門の娘お秋、藝者小糸(秀蝶)三河屋手代竹松、溫泉宿の主人槇山太一、山中悴久三郎(時雄)お樂の父木村栄吉、老僕嘉平次、番頭森吉藏(時右衞門)三河屋の下女お德、久馬の許嫁靜江、藝者今子(時和)近所の妻君おまき、辰三の女房お福(桃蝶)村の歩きたん熊、酒屋の若者三河屋手代久吉(五郎丸)三河屋老主人庄兵衞、女土募集員菅原(四郎)非人清公、旅行團鶴橋、米屋の若者(笑將)牛乳配達夫、非人萬藏、旅行團上原(勢蝶)救世軍1、非人團公、旅行團竹林、自動車運轉手(蝶太郎)乞食頭勘太、溫泉旅館の主人近藤伍三郎(宗蝶)

浪花座四月興行

—松竹家庭劇お目見得—

一日初日

ヒル十二時

ヨル五時半毎日二回開演

【狂言】第一、川竹五十郎作「スポーツ狂時代」一場、第二、茂林寺文福作「浮浪者の娘」一場、第三、茂林寺文福、川竹五十郎合作「朝顔の種」一場、第四、川竹五十郎作田村新綴「角笛」一場、第五、小橋梅夜作「父の場合」二場

【配役】母お初、島田謙造、父文助(十吾)長男章太郎、出前持三吉、牧場主仙之助(天外)主人太田、友人小川、山本邦雄(十次郎)木村忠助、叔母お豐(天照)息子良一(三郎)執事木村、獸醫杉本、友人松見(一郎)親類村上(致雄)高橋藤七(富士鳥)家守遠藤(鐵彌)親類矢場(八四呂)長家の人、親類加藤(時彌)下男由松、搾取人萬造(左久馬)頭藤兼二郎、水原七郎(賀川)鳴尾啓三、搾取人彌吉(三樂)兄貞造、谷本治平、父善七(小織)娘光子、妻お絹(石井)娘愛子(春日)娘おせき(村田)下女おせつ(都)妻おかく、女房お米(守住)妾お花(松井)妻おきん、下女おさと(濱地)妻久江、娘お玉(如月)下女おはる、妻芳子(春野)

新國劇 春季公演

——角座——

四月一日初日

正午・五時半・二回開演

【狂言】第一エドモン・ド・ロスタン作、楠山正雄飜譯、額田六福補綴「白野辨十郎」五幕、第二長谷川伸作、講談倶樂部四月號所載「雪の渡り鳥」二幕六場

【配役】宗匠杉亭、五兵衞(中井)來栖生馬(野村)宗匠東籬、帆立の丑松(金井)

其日庵雷藏（南）白野辨十郎（島田正吾）小童、爪木の卯之吉（丸茂）浪人大山、六平、角兵衞獅子勘藏（畑中）朱雀隊村瀨彌兵衞（秋月）諸太夫根岸土佐守（小川）黑目の又五郎、有馬源兵衞（伊藤）畵家芹影捕吏の頭（雄島）朱雀隊佐々木金藏、鯉名の銀平（辰巳）市川紋十郎、岩角の多治郎（高木）高田軍二、熊の九郎藏（鈴木）十年後の千種（久松）女房おりん、院主淨圓（山路）千種姫（二葉）お茶子おかめ、五兵衞娘お市（永島）侍女（初瀨）

大日蓮記念興行

六百五十年遠忌

——文樂座——

四月一日初日

毎日午後三時開幕

【狂言】前「日蓮聖人御法海」法論石のだより本門寺の段まで（塚原三昧堂の段）食滿南北新作、竹本津太夫鶴澤友次郎作曲中「近頃河原の達引」堀川猿廻しの段、切「鬼一法眼三略卷」五條橋の段

【太夫三味線】前「日蓮上人御法海」法論石（日蓮和泉太夫島太夫、善智坊長尾太夫鏡太夫、叶）土牢（相生太夫、友之助友造大隅太夫道八）北條館（文字太夫勝平）鶴ケ岡（和泉太夫島太夫、綱右衞門清二郎）聖人御難（富太夫源路太夫、猿太郎友衞門）北條長時天變（綾太夫友若）行合川（辰太夫龜久太夫陸路太夫播磨太夫、叶太郎友作）龍の口赦免（鍛太夫新左衞門）食滿南北新作佐渡塚原三昧堂（つばめ太夫仙糸、津太夫友次郎、歌助芳之助）勘作住家（駒太夫重造、古靱太夫清六）本門寺（日蓮貴鳳太夫、日朗町太夫、日像浪花太夫、光盛文太夫、八助廣太郎）中「近頃河原の達引」堀川猿廻し（土佐太夫吉兵衞團六）切（鬼一法眼三略卷」五條橋（牛若丸南部太夫ッレ源踏太夫千駒太夫長子太夫、吉彌ッレ歌助寛市、吉太、喜代之助、辨慶つばめ太夫ッレ辰太夫陸路太夫播路太夫、廣助ッレ友之助友平猿二郎友二）

【人形劇】女房おでん、娘おしゆん（文五郎）庄屋德藏（玉次郎）船頭彌三郎、東條判官（玉幸）宿屋入道、本間六郎左衞門、（門造）女房お梶（紋太郎）代官黑澤荒藤太（兵次）鵜遣勘作（光之助）岩淵丹下（玉德）極樂寺了觀、與次郎の母（小兵吉）女房千日尼、辨慶（政龜）平塚丹平（傳之助）四條金吾、井筒屋傳兵衞（扇太郎）善智坊遠藏左衞門尉爲盛（玉松）日蓮聖人、兄與次郎（榮三）牛若丸（紋十郎）

關西大歌舞伎

——東海道巡業陣——

【狂言】一番目篠山吟葉作「鳥羽の戀塚」二幕、中幕「近江源氏先陣館」盛綱首實檢の場新作中井泰孝作「春日局」一幕、二番日大森痴雪作玩辭樓十二曲の內「小稻半兵衞戀の湖」二幕、大喜利長唄連中上の卷「伯藏主」竹本連中長唄連中、下の卷「勢獅子」常碧津連中

【配役】佐々木盛綱、稻野谷半兵衞（鴈治郎）源左衞門尉渡、福の方後に春日局、錦屋小稻（福助）伊吹藤太、白藏主、狩人駒作鳶頭蝶吉（長三郎）郎黨新吾、妻早瀨、藝者おりん、八木重兵衞、藝者彌榮吉（吉三郎）郎黨新六、角倉與一（政治郎）侍女皐月、長男千熊、仲居おたま藝者秀松（延太郎）袈裟御前、妻篝火、稻葉佐渡守、許婚おみき、鳶頭榮五郎（魁車）母衣川、板倉伊賀守、宅原源左衞門（大吉）源太夫遠光古、野新左衞門郎黨原田重作、粟津傳八（九團次）竹下孫八、男衆小平（箱登羅）後室微妙、母親お縫（蓮女）北條時政、望月雄之進（市藏）遠藏武者盛遠和田兵衞秀盛、仲間助七（延若）

編輯後記

四月の道頓堀は松竹座の「春のおどり」をトップに浪花座の家庭劇、中座の五郎劇、角座の新國劇と恰度花見時に相應しい賑かな排列です。

×

「お手數のかゝるお花見より、お手數のかゝらぬお芝居へ」と言ふやうな惹句が道頓堀に掲げられるのも陽春四月道頓堀情景の一つでせう。

×

「春のおどり」は三月から四月へ――第五週に入つて彌よ盛況です。それに劣らないのが中座の五郎劇三十年記念興行で、これも三月から四月への打越しです。

×

幸ひ本號の卷頭に曾我廼家五郎氏から「三十年記念興行を終へて」の題下に玉稿を頂[illegible]ればに御熱讀を願ひます。

×

堀正旗、野淵昶兩氏の第一劇場に關する寄稿は好劇家、わけて新劇愛好家必讀のものです。

×

食滿南北、土佐太夫、古靱太夫三氏の文樂座四月興行に關する好讀物は特にお願ひして執筆して頂いたもので、其他額田六福、俵藤丈夫、森田信義氏等の好文章を始め、喜劇俳優諸家の誌上漫談「會春と喜劇オン・パレード」大森正男氏の「春のおどり」に就いて及び新國劇新人中の錚々島田正吾、辰巳柳太郎兩君等の玉稿を得たことは何より嬉しいことです

×

以上の如く例によつて好讀物滿載の本號を愛讀者諸氏の許に送り出すに當つて、今後共本誌に就ての忌憚なき御意見をどん〳〵賜るやうに、本誌をより發展させる意味に於て切望する次第です。

（大橋照夫）

昭和六年四月一日發行
雜誌月刊『道頓堀』第六年第五十五輯

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價 金參拾錢（郵稅登錢五厘）

昭和六年三月三十一日印刷
昭和六年四月一日發行
大阪市南區久左衛門町八番地
松竹土地建物興業株式會社
編輯兼發行者 島江鎮也
大阪市東成區鶴橋南之町一丁目
印刷者 北島竹次郎
大阪市東成區鶴橋南之町一丁目
印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹土地建物興業株式會社 道頓堀編輯部
電南〔二四〇番〕〔六六六五番〕

春セル新柄特賣
十合呉服店

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和六年三月三十一日印刷
昭和六年四月一日發行

若く美しく健かなるに

ムーリク
美身
ブラク

明るく美しい薄化粧は
クラブビシン

「道頓堀」第五十五輯　第六年四月號

一部金參拾錢